

機動戦士ガンダムSEED もう一人の英雄

どこかのシャルロッ党

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ザフト軍によるヘリオポリス襲撃と時を同じくして、自分が転生者であることを思い出したショウマ・イズル。彼は幼なじみを守る為に地球連合軍によって開発されたG兵器に乗り込む――

これはキラとアスランともう一人の英雄の物語。

※同時並行の機動戦士ガンダムSEED もう一人の英雄 AS
T R A Y R 作者 オウガ・Ωさん も宜しくお願ひします。

目 次

オリキヤラ・他作品キャラ設定

プロローグ

PHASE—01 「その名はブリツツ」

PHASE—02 「戦いの始まり」

PHASE—03 「ストライクとブリツツ」

PHASE—04 「ハーフコートデイネイター」

PHASE—05 「崩壊のヘリオポリス」

PHASE—06 「天使と竜」

PHASE—07 「ビシディアン」

PHASE—08 「アルテミス襲撃」

PHASE—09 「宇宙の傷跡」

PHASE—10 「大天使に舞い降りた歌姫達」

PHASE—11 「キラと妖精」

PHASE—12 「駆け抜ける嵐」

PHASE—13 「分かたれた道 1」

PHASE—14 「分かたれた道 2」

PHASE—15 「転生の影響／覚醒のキラ」

PHASE—16 「戦いへの選択」

PHASE—17 「限界領域」

PHASE—18 「フレイの影」

PHASE—19 「燃える砂漠」

PHASE—20 「アセム・アツシユ」

PHASE—21 「カガリ」

PHASE—22 「ショウマの目覚めと飛び立つ黒い翼」

PHASE—23 「陽はまた昇る」

PHASE—24 「怒りと買い物と時々虎 1」

PHASE—25 「怒りと買い物と時々虎 2」

PHASE—26 「レイラ・マルカル」

PHASE—27 「砂漠の虎、黒き翼1」

オリキヤラ・他作品キャラ設定

ショウマ・イズル（16） イメージCV 石井真

性別 男性

身長 170cm

体重 57kg

容姿 蒼穹のファフナー（第1期）の真壁一騎。瞳は蒼。

搭乗機 GAT-X207 ブリツツ GAT-X105 スト

ライク（一時的）????

ヘリオポリスで学生生活を満喫。工業ガレッジでは便利屋として働いており、キラを始めとした学生から半分認知されている。父親がコーディネイター、母親がナチュラルでありショウマはハーフコードィネイターとして生を受けた。幼少期それが原因でイジメられ、人間不振に陥るも幼なじみのクリスに救われる。ヘリオポリスでの襲撃の際に自分が転生者であることを思い出す。イケメンと評判だがスケベがたまに傷。

GAT-X207 ブリツツガンダム

全高 18.36m

重量 73.50t

装甲素材 フエイズシフト装甲

動力源 バッテリー

特殊装備 ミラージュコロイドシステム

武装

・攻防システム 『トリケロス』

ビームサーベル

50mm高エネルギービームライフル

3連装超高速運動体貫徹弾 ランサーダート

・ピアサーコック グレイブニール

回想で何回も撃破された不遇な機体。原作ではニコルの搭乗機であつたが、本作ではショウマが前半に搭乗するMS。ストライク以上に活躍させたい（作者談）

クリス・ユキネ（16） CV 高垣彩陽

性別 女性

身長 153cm

B／W／H 90／57／85

原典 戦姫絶唱シンフォギア

搭乗機 GAT-X 207 ブリッツ（一時的）

ショウマのヒロイン。性格や容姿などは原作と変わらないが、両親がいるので若干柔らかくなっている。ショウマと同じハーフコーディネイターである。偏見を嫌い幼少期にイジメられていたショウマを助けたことがある。それから一緒にいる機会が増えて、一緒にいる時間を過ごす中でショウマの優しさに触れて好意を抱く。歌うことが好き。後にフレイが嫌いになる。

レイラ・マルカル（18） CV 坂本真綾

性別 女性

原典 コードギアス 亡国のアキト

搭乗機 ZGMF-1111ゼダス

クルーゼ隊に属する少女で、ラウの補佐である。血のバレンタインの悲劇で両親を失い、核を使用した地球連合に現時点では隠しているが憎しみを持つ。ヘリオポリスでG兵器奪取の手引きをしたが、襲撃の際に脱出来ずにアーケエンジェルへ。ショウマやクリスが積極的に話し掛けたことで、少し心を開いている。一応彼女自身も自らの意思で戦争に参加しているが、ラウのヘリオポリス襲撃には未だに納

得いかない節がある。

世界観

基本原作同様だが、ショウマなど他のイレギュラーな存在により本來ならいないはずの人物（クリスやレイラなど）が存在したりする。

プロローグ

コズミック・イラ70——遺伝子調整によつて誕生した“コーディネイター”と遺伝子調整されていない人間”ナチュラル”の対立は激化していた。ナチュラルによつて構成された”地球連合軍”はコーディネイター達が住むスペースコロニー郡”プラント”の”ユニウスセブン”に核を撃ち込み、プラント側は深刻なダメージを負った。この”血のバレンタインの悲劇”と呼ばれる事件が引き金となり、プラントの軍事組織である”ザフト”は地球連合軍との戦争へ入る。

ザフトは人型機動兵器”モビルスーツ”を導入し、更には核分裂を抑えるニュートロンジャマーを打ち込み核は使用不可となり、モビルスーツの圧倒的性能差を見せつけられた地球連合軍はザフトに押されていた。戦局は変わらぬままC.E.71……地球連合軍はザフトに対抗する為に5機のG兵器を建造していた。

コロニー・ヘリオポリス……L3宙域存在するオーブの資源衛星コロニー。シリンドラー型のコロニー内部は工業ガレッジがあり、戦いとは無縁な地である……しかし不穏な影は徐々に忍び寄っていた。

工業ガレッジのキャンパスの内部……学生達が行き交いする。そして工業ガレッジの外にある芝生で横わたる黒髪の青年がいた。途中で読書していたが、いつの間にか眠りに付いていた。

「…………」

「お……こんな所にいたのか……」

「…………」

「オイ」

「…………」

「オイ！」

「…………」

「起きろつての！」

「ぐふ！……いでで……せつかく夢の中で女の子とイチャイチャしてたのに……」

「馬鹿な事言つてないで、行くぞシヨウマ」

「あだだだ!? 引つ張るな」 ク里斯!?"痛いだろ!?"

白髪の少女”クリス・ユキネ”によつて耳を引っ張られる黒髪の青年 シヨウマ・イズルはクリスに引っ張られながら中へと入る。

「たく、アタシがいなきやお前はすぐにサボりやがるな……」

「仕方ないだろ。こう見えてもシヨウマさんは忙しいんだよクリス。分かつたら手を離し——『あれ……ユキネさんとシヨウマ?』お前は……」

「んあ?……おお、誰かと思つたらキラじやねーか!」

「相変わらず仲がいいね二人共。まるで夫婦みたいだよ?」

「ば!……だ、誰が夫婦だ!」

茶髪で何処か幼い顔立ちの青年”キラ・ヤマト”がシヨウマとクリスに話し掛ける。

シヨウマは工業ガレッジ内では便利屋として有名であり名を知らぬ者はいない。目の前にいるこのキラも時々、シヨウマに頼み事をしている。

「シヨウマ、この後暇かな?…出来れば付き合つて欲しいんだけど。

クリスさんも」

「別に俺は構わないが、クリスは?」

「アタシは構わないぞ」

「じゃあ決まりだね!」

コロニー・ヘリオポリスの周辺に二つの艦。それはザフトのヴエサリウスとガモフである。ヴエサリウスのブリッジでは黒服の男と仮面を付けた白服の男が話していた。

「そう難しい顔をするなアデス」

「ハツ……しかし評議会からの返答をもらつてからでも遅くないと思いますが」

「それでは遅すぎるのさアデス。今ここで評議会の返答を持つていてはいづれこの兵器を使われる可能性が高い。だから今ここで先手を打つ……今から侵入捜査で一人ヘリオポリスへ送り込む。その侵入捜査員の合図で、作戦開始だ」

「ハツ！」

「さて……準備はいいかね?」レイラ・マルカル

「はい」

ブリッジに一人の女性が入る。ザフトの赤いパイロットスーツに身を包んだ金髪のロングヘアの女性 レイラ・マルカルはブリッジに入るなり敬礼する。

「侵入捜査には彼女に行つてもらう」

「彼女に……ですか？」

「ああ。レイラ、あとは君に一任する……いいな?」

「はい、クルーゼ隊長……では」

レイラはブリッジを後にしてヘリオポリスへと向かう――――――

「(もう二度とあんなことはさせない……だから)」

PHASE—01 「その名はブリツツ」

レイラは密かにヘリオポリスへと侵入する。パイロットスーツを脱ぎ、そこから私服へと着替える。そして工業ガレッジとは別にある”モルゲンレーテ”の工場。そこには5機のG兵器が管理されていた。

「対象確認……あとはアスラン達に託します」

レイラは周りを見渡し手元に持つたスイッチでヴエサリウスに合図を送る。そしてクルーゼの指示により複数の赤いパイロットスートに身を包んだ男達がヘリオポリスへ侵入する。同時にザフト艦もヘリオポリスへ近付く。

「なにザフトだと!? どういう冗談だそりや！」

一方で地球連合軍の新型機動兵器を運び出す為にこのヘリオポリスへ訪れていた”ムウ・ラ・フラガ”はザフトの出現にただ驚きを隠せない。中立であるはずのヘリオポリスにザフト……嫌な胸騒ぎを感じつつ、ムウはメビウス・ゼロへ乗り込む。

「たく……どうなつてやがる……ルークとゲイルはメビウスにて待機だ！まだ出るなよ！」

ヘリオポリス内部にザフトのMS”ジン”が現れる。そして外部からの攻撃により揺れるヘリオポリス。そして先程キラからモルゲンレーテの社屋に同行して欲しいと頼まれて一緒に付いてきたショ

ウマとクリスも巻き込まれていた。

「ちきしょう！キラ達とはぐれるし、ザフトの襲撃……！ついてねーな！」

「オイショウマ！何処に向かってるんだよ!?」

「取り敢えず安全な場所に！……たく、ここは中立じや―――つ！」

「あ”あ”アアアアア!!」

クリスを連れて何処かに避難しようとしたショウマ……その時、頭に激しい痛みが走る。膝から崩れ去るショウマ……次第に頭の中に色々と浮かび上がる情報……心配して声を掛けるクリスをよそに、ショウマはあることを思い出す。

「（どうか……そういうことか……ガンドーム……思い出したぜ……）」「オイショウマ大丈夫か!?——『ナチュラルか!?』ざ、ザフト!?」「——つ！」

頭の痛みが瞬時に静まり、ショウマは近くに落ちていた銃を拾う。そして素早くそれを放ち、ザフト兵の腕を撃つ。

『こ、このガキ!』

「邪魔だ！」

そしてザフト兵に蹴りをお見舞いしたショウマはクリスを連れてある場所へ……そこには三台のトレーラーにそれぞれあるものが載っていた。

「クリス……走れるか」

「あ、ああ！けどお前！さつきのは――『あれは気にするな』つ!?お、オイ!?」

「取り敢えずどれかに乗れば！――『すみませんが、通しません

よ』ザフト!』

クリスを抱きかかえてトレーラーの方へ向かうショウマ……しかし前方に赤いパイロットスーツのザフト兵”ニコル・アマルフィイ”が立ちはだかる。

「どけ!」

「この……!」

ショウマは銃を取り出し、ニコルも同時に銃を取り出す——しかしショウマの方が早く、ニコルから銃を弾く。

「すまないな!」

「つー・ぐう!?

ニコルに近付き、蹴りをお見舞いしたショウマはクリスを連れて1台のトレーラーに載っているMSに向かう。そしてショウマはクリスと共に機体の中に入る。

「これってモビルスーツなのか?
らしいな——」

ショウマはキーボードを叩きながらOSを書き換える。そして数秒も経たない内にショウマの乗るMSは起動する。

「ふう……」

「動く……のか?」

「ああ。しつかり掴まつてろよクリス」

ゆっくりと立ち上がる”GAT-X207 ブリッツ”……一方でニコルを回収したイザークと、デイアツカもそれぞれの機体を奪取して乗り込む。

『デイアツカ!あのG兵器には恐らくナチュラルが乗っている!ニコルは失敗だ!』

『たく、面倒だぜ！』

ブリッツは一足早く、デュエルとバスターから離れる。

PHASE—I02 「戦いの始まり」

「そんな・ヘリオポリスは中立じやなかつたのかよ!?」

「……中立だろうと関係ないだろ。それに恐らくザフトが何故わざわざこのヘリオポリスに来たか……狙いはこいつさ」

「このモビルスーツの為にヘリオポリスを……！」

ガシン、ガシンと地を少し揺らしながら歩くブリツツ。モニターに映る変わり果てた惨状にクリスは肩を震わせる。ブリツツがひたすら歩く中で1機のG兵器が接近する。赤い機体” G A T — X 3 0 3 イージス”である……

『ニコル成功したのか!』

「……何が成功したのか、教えて貰おうか」

『ニコルじゃない?ちい!』

イージスはビームサーベルを展開してブリツツに迫る。ブリツツは武装の一つであるトリケロスからビームを撃つがイージスはシールドで防ぎ接近する。そんなショウマに後ろから” デュエル・バスター”が迫る。

『アスラン!ニコルが失敗した機体だ!なんとしてでも!』

『すみませんアスラン……』

『ちつ、しくじりやがつて!』

『ショウマ!』

「——甘いな!」

バスターからの砲撃。バスターの砲撃がブリツツに直撃——に見えたが、トリケロスでなんとか防ぐ。3対1では勝敗は分かり切っている……ショウマはひとまず3機から逃れる。ふいにモニターを見て、ブリツツのエネルギー残量は半分を切っていた。どうやら、事

前にエネルギー満タン前に動かしたらしい。

「もうパワーが半分かよ……そうか、満タンじゃないのか……」

「ショウマ……」

「なんだ? ……っ! ……クリス?」

「これが……戦争……なのか? ……アタシ……」

クリスはショウマに思わず抱きつく。先程からモニターに映る人間の死体を目の当たりにしたクリスはつい恐怖心から現実から目を反らす。普段は少々口が悪く、男勝りなどころがあるクリスでも、目の前で起こっている戦いはさすがに恐怖を感じた……そんなクリスをショウマは宥める。

「大丈夫だクリス」

「…………」

「俺がお前を守る。だから安心しろ……今はな」

「…………ショウマ……」

「怖いなら膝に乗るか? ……少しは落ち着くと思うぜ」

「? ……ば、馬鹿じやねーのか!? こ、こんな時に――」 p p p p p p

” なんだ!”

「この型式は……G A T — X 1 0 5 ……ストライク? あれか」

ブリツツの前方に” G A T — X 1 0 5 ストライク”とザフトのモビルスーツ ジンが戦っていた。どうやらストライクはブリツツ同様に奪取されずに済んでいた……ショウマは機体を加速させようとした……

「ショウマ! あれ!」

「人? ……逃げ遅れか? ……仕方ない!」

モニターの端に金髪のロングヘアの女性がストライクとジンの戦

闘を見ていた。ショウマは女性の近くに機体を動かす——
一方、レイラはG兵器奪取の一部始終を見ていた。

「（まさかストライクが……ラステイさんは失敗……）」
『——そこの人！』

「……!?」

声がする——振り返ると、そこにはGAT-X207 ブリッツが立っていた。どうやらストライク同様に奪取に失敗したと分かつたレイラはひとまず警戒心を露にする。

『早く掌に！こゝは危険だ！』

「（地球連合の人？……にしては、若すぎるような声……）」

『早く！』

「（こゝは指示に従いましょうか……）は、はい！ありがとうございます！」

レイラは一般人を装い、ひとまずブリッツの掌に乗る——すると同時にストライクに苦戦を強いられていたジンのパイロットミゲルは機体を自爆させた。ジンが爆発し、ストライクはその巻き沿いを食らって倒れる。

「（まさかミゲルさんが自爆なんて……奪取出来たのは3機……つ）」

レイラは結果的に3機しか奪取出来なかつた結果にただ悔しい表情を浮かべるしかなかつた。

PHASE—03 「ストライクとブリッツ」

ヘリオポリスでブリッツとストライクが戦闘を終えた頃、エンデュミオンの鷹の異名を持つムウ・ラ・フラガは一人で奮闘していた。仲間や母艦はやられ、尚一人でザフトのモビルスーツと交戦していた。

「ちい……つ！この感じは！……ラウ・ル・クルーゼか！」

「貴様は何時でも邪魔だな……ムウ・ラ・フラガ！」

「こんな時に！」

ザフトのモビルスーツ ジンが退散する中で1機のモビルスーツが姿を現す。それはラウ・ル・クルーゼの駆る新型のMS シグーである。ムウは行かせまいとラウを追撃する。

「悪いが、今はお前の相手をしている暇はないのでね」「なに！……まさか、コロニー内部に！」

ラウのシグーはムウのメビウス・ゼロの攻撃を交わしてヘリオポリス内部へ侵入する。

一方でなんとかザフトのモビルスーツを退いたショウウマとキラは先程乗り合わせたブリッツとストライクから降りていた。そしてキラの友人である”トール” ”カズイ” ”サイ” ”ミリアリア”もその場にいた。キラはストライクと一緒に乗っていた地球軍の女性を寝かせる。先程のストライクが倒れた同時に頭を軽く打ち、気を失っている。

「まさかあの機体にショウウマが乗つてたなんてびっくりしたよ……」「たまたまだよ。キラ……その人は」

「多分地球軍の人……だと思う」

「マジかよ!……んで、これからどうすんだよ?なんかヤバいことになってるし」

トールが周りを見渡す……何処もかしこも酷い有り様で、キラやトール達はその場にいるしかなかつた。一方でショウマはクリスと先程助けた民間人の女性（レイラ）を気に掛ける。

「クリス大丈夫か？」

「あ、ああ……今はなんとか……うん」

「そうか。えと……君は?」

「私も大丈夫ですよ……すいません。避難に遅れてしまつて」

「そななんだ……すいませんけど……お名前は?」

「……レイラです。レイラとお呼びください」

「分かつた……（それにしてもレイラさん……綺麗な人だ。おっぱいもまた）」

「……オイ」

「く、クリスさん?……あだだだだ!」

「……バカ」

レイラに見惚れていたショウマが気にくわなかつたのか、クリスはショウマの頬をつねる。レイラは思わずキヨトンとした表情になる。

「——うう

「あ!大丈夫ですか?」

「ええ……大丈夫よ……悪いけど、この場にいる皆一列に並んでちょうどいい」

気を失っていた地球軍の女性が目を覚ました。目覚めた直後、彼女はそう言つてキラ達を一列に並ばせる。女性はキラ達を確認した後、ストライクの他にブリツツが存在していたことに驚く。

「X207!?……誰が……」

「俺です……」

「！……あなたがあのX207を動かしたというの!……」「まあ……そんなところですかね……ハハハ」

ひとまずGAT-X105とGAT-X207が無事であつたことに安心した女性は再び口を開く。

「私はマリユーラミアス……地球軍の将校です。X105、X207は軍の最高機密です。事情はどうであれ、最高機密を見てしまつた以上あなた達には、しかるべきところと連絡が取れ、処置が決定するまでは私と行動を共にしてもらいます」

「なんだよそれ!?」

「アタシ等はヘリオポリスの民間人だぞ!?……だつたらアタシやショウマ達はこれ以上関係——『そんなこと言つてられる状況じやないの!』つ！」

「だから——」

マリユーラが話を続けようとした時、爆発音が響く——ラウ・ル・クルーゼの駆るシグーが現れる。

「ほう。あれが残つた最後の2機か

「まずい！ザフトのモビルスーツが！」

「仕方ない」

「つ！待ちなさい！」

ショウマは再びブリツツの元へ向かう。制止するマリユーラの声を聞かずには走り去ろうとした時、クリスが手を掴む。

「ショウマ！」

「今は状況が状況だ……皆ここで、仲良く死ぬわけにはいかないだろ！だからクリス……」

「……けど！」

「何故貴方は戦うのです？」

止めるクリスとショウマの間にレイラが入る。レイラは真剣な眼差しでショウマに問う。

「軍でもない貴方が戦わなくとも……いいはずでは……」

「……そうだな……確かに軍にも入つてない俺には関係のない話だ。でも……俺の身近な人を守る為に戦う……これが理由じやダメか？」

「…………貴方は」

クリスとレイラからゆつくり離れるショウマ。そして再びブリッツのコクピットへ入り、機体を起動させる。フェイズシフト装甲がONになつたことで装甲もグレーから黒へ変化する。

「やるしかない……！」

ブリッツはシグーに向かつてトリケロスを向ける。

PHASE—04 「ハーフコードイネイター」

「こんなところで！」

『取り損ねた内の1機……ならば破壊させてもらう！』

ヘリオポリス内部に侵入して来たラウの駆るシグーがショウマの駆るブリツツに迫る。ブリツツはトリケロスを盾に攻撃を防ぐ。激しい火花を散らすも、装甲は無傷。

『厄介な装甲だ！』

「クリス達がいる場所で！」

『早い！』

ブリツツはビームサーベルを展開してシグーに斬り掛かる。シグーの武装を破壊——同時に大きな爆発が起き、大きな戦艦が姿を現す。

『艦だと!?……ちい！』

「な……行かせるか！」

「来る……！」

「待つて！その武装は！」

現れた大きな艦にラウのシグーが迫る。ショウマは追いかけるが、間に合わない。丁度調整が終わつたキラのランチャーストライカーを装備したストライクがアグニを発射する。シグーは片腕を失うも、ついでにコロニーに穴が開いてしまう。

「あ……」

「（やべーな……まあいいか……）」

シグーはブリツツを後に外へと出る——ショウマとキラはその後、現れた艦“アーヴエンジエル”へと降りる。

「ラミアス大尉！よくぞご無事で！」

「バジルール少尉！……貴女こそ、よくアーチエンジェルを守つてくれました……」

”ナタル・バジルール”はマリユーと互いに生存を喜び合う。キラやトール達はここにあらずという感じだ。

「守られたのはこの2機ですか？」

「ええ……X105とX207です」

「あの2機……一体誰が？」

「……この二人よ」

「民間人！……それも子供じゃないですか！」

規律に厳しいナタルは民間人……それも子供の学生という事実。キラは顔を険しくしているが、ショウマは別にといった感じだ。そんなやり取りの直後、一人の男性がこちらに向かって来る。

「へえ、こいつは驚いた……地球連合軍第7機動艦隊所属のムウ・ラ・フラガ大尉だ。乗艦許可を貰いたいんだが……この艦の責任者は？」

金髪の癖つ毛が特徴的な男性”ムウ・ラ・フラガ”はマリユーとナルと話し合う。数秒後二人と話し終えたムウはキラとショウマの方へ歩み寄る。そんなムウにキラとショウマは互いに訝しげな眼差しでムウを見る。

「君達……コーディネイターだろ？」

「……」

「……自分はそう言いにくいくらいですが……」

「？……何がだ？」

「自分は……ハーフコーディネイターです」

「「「「……!!」」」

「ほう……」りやまた……」

ショウマはコーディネイターの父とナチュラルの母を持つ、”ハーフコーディネイター”だ。ナチュラルでもありコーディネイターでもあるショウマ……場にいた全員は驚く。そもそもハーフコーディネイターは現時点ではまだ少ない方で、物珍しくある。

「だつたらなんだよ……」

「……?」

「ショウマは……コーディネイターだろうがナチュラルだろうが関係ねえ……キラだつて！コーディネイターだから……そうやつて銃を向けるのかよ!!」

「ツ！そうだ！コーディネイターでもキラは敵じゃない！ショウマだつて！さつきの見てなかつたのか!?どういう頭してんだよ！」

銃を構えていた兵やムウにクリスはそう言つた。クリスの言葉にトルもキラやショウマを守る為に兵にそう言つた。

「銃を下ろしなさい。ここは中立のコロニーよ……戦争が嫌で、ここに移ったコーディネイターがいても不思議じやないわ」

「……すまないな、こんな騒ぎにしちまつて。俺はただ聞きたかっただけなんだ。それとショウマの坊主……お前があの機体のパイロットか？」

ムウが言うあの機体とはブリッツのことだ。ショウマはムウの問い合わせに頷く。

「さつきは助かつた。サンキューな」

「は、はい……」

ムウはそれだけ言うと自分の機体へ戻る。ショウマ達は一度待機を命じられ、アークエンジェルの中に入る。

PHASE—05 「崩壊のヘリオポリス」

ザフトのヴエサリウスのブリッジではラウがミゲル達を集めていた。ストライクとブリッツとの戦闘映像を見ながらストライク・ブリッツの破壊という命令を下す。

「この2機がどうしてここまで動けるかは知らない。だがこのまま放置という訳にもいかん……D装備で再び出撃せよ。あの2機と戦艦はなんとしても落とせ」

「「「はっ！」」」

「隊長！自分も出撃させてください！」

「アスラン……いいだろう。奪取した機体の性能……それも興味あるしな」

「はっ！」

アスランはラウに敬礼した後ブリッジを出る。

「宜しいのですか？」

「ああ。地球軍の新型……どれ程の物か拝見出来るいい機会さ」

「はあ……それと、レイラの事はどうするおつもりで？」

「その事なら心配はいらん。レイラもあるの騒ぎで、ひとまず民間人に紛れて避難している。心配せずとも、彼女は優秀なのだよ」

いつザフトの襲撃があるか分からぬ……アーケンジエルのクルー達は艦の整備やストライクとブリッツの整備に追われる。そして、民間人としてアーケンジエルに乗艦したレイラ・マルカルはクリスと一緒に部屋にいた。

「はあ……何がなんだか……」

「（確かに地球軍の新型の奪取…………それは脅威だということは分かる。でも……わざわざヘリオポリスに攻撃する必要があつたのでしょうか）」

「なあ」

「は、はい！」

「そんな驚かなくとも……お前もガレッジの生徒なのか？」

「い、いえ。私は――『お断りします！』……この声は」

声が聞こえた為、レイラとクリスは何事かと部屋の外へ。そこではマリューにキラが何か言っていた。その隣ではショウマが困っていた。どうやら、キラはストライクに乗る事を拒絶していた。

「これ以上僕達を巻き込まないでください！貴女の言つたことは正しいのかもしない。僕達の外の世界は戦争しているんだつて……でも、僕等はそれが嫌で、戦いが嫌で中立のここを選んだ！だから……」「キラ君……」

「キラが出たくないなら、出なくていい」

「ショウマ……」

「でもよキラ……この艦には俺やお前以外にストライクやブリッツは動かせない。俺達は軍人じやないが、身近な人を守るには俺達が行くしかない」

「……ッ」

ショウマがキラにそう言つた直後、ザフトの襲撃を知らせる警告音が艦内に響く。ショウマはマリューの指示を聞いて格納庫へ向かう。キラもショウマに続く――

「ショウマ！」

「クリス……」

「…………行くのか？」

「ああ。心配すんなつて…………ひとまず艦を守らないといけないからな」

クリスにそう言つたショウマは急いでブリツツへ乗り込む。キラのストライクはソードストライカー装備して出撃。ショウマのブリツツもそれに続いて出撃する……キラが開けたコロニーの穴からD装備のジンが侵入する。

「なんてこつた！拠点攻撃用の重爆撃装備だぞ！?あんな物をここで使うつもりか！」

「!……ストライク、ブリツツは艦を守れ」

ナタルの指示を受けたキラとショウマ。ショウマの操るブリツツはミゲルの操るバルルス改特火重粒子砲を装備したジンに接近する。

『そらあ落ちろ！』

「ビーム兵器か！交わしたらコロニーに穴が！」

ジンがビームを放つ。ブリツツはトリケロスでビームを防ぎながらジンに接近……そしてトリケロスに装備された”3連装高速運動体貫徹弾 ランサーダート”を一本左手に持つ。

『そんな棒で何が出来る！』

『ランサーは！こう使う！』

ブリツツはランサーダートを投擲……ジンの特火重粒子砲を破壊。そして左腕に装備された有線式のロケットアンカー グレイプニー^ルを放つた。

『なに？』

『これ以上はアアアアア!!!』

グレイプニー^ルをぶつけて隙が出来たジンに、ブリツツはビームサーベルでジンを真っ二つに斬る。ミゲルのジンはアスランの駆る

イージスの前で爆散する。

『ミゲルっ!!……よくもミゲルを!!』

「X 303、イージスか!」

「ショウマ下がつて!」

こちらに向かうイージス。しかしキラのソードストライクがイージスと戦闘に入る。残りのジンはブリツツに向けて攻撃を始める。

「そんな大勢で来るとか、イジメだろ!!」

『落ちろオオ!!!』

ジンが放ったミサイルをビームライフルで破壊するが、破壊出来なかつたミサイルがコロニーの壁に次々と当たり、ヘリオポリスは崩壊寸前だつた。ショウマはひとまず1機を撃墜して、更にもう1機撃墜する。

「はあ、はあ、はあ……つーなんだ!?」

「ぐう!?

「一体何が!」

ブリツツ・イージス・ストライクの3機に震動が襲う。やがてヘリオポリス全体が揺れ始め、コロニー ヘリオポリスは限界を迎えて崩壊してゆき、ブリツツやストライク、イージスはそのまま宇宙空間へと投げ出された。

PHASE—06 「天使と竜」

ヘリオポリス崩壊……それはキラやマリュー達にとつて信じがたい光景だつた。崩壊と同時にザフトは撤退したらしく、戦闘区域にはストライクとアークエンジエルしかいなかつた。しかしそこにブリツツの姿はない…………

「…………いてて…………くそ、ここは何処だ？キラ達は…………」

ヘリオポリスがあつた位置から随分離れてしまつたショウマ。幸いにもザフトはおらず、機体のエネルギーもまだある。ひとまずショウマはアークエンジェルへ向かうことにする。

「なんだろうな…………何故かヘリオポリスの崩壊を知つていたような気がする…………さて…………ん？熱源…………」

近くに熱源…………モニターで探すと、遠くに廃棄資源衛星を発見する。普通なら警戒するところだが、ショウマはいつの間にブリツツを衛星へと動かす。やがて衛星内部に侵入したショウマはブリツツから降りて、更に内部へと歩く。

「人の気配はない…………この先は…………」

ひたすら歩くこと数分で格納庫へ到着する。そしてそこには本来ならばこの”コズミック・イラ”に存在しないMSが立つていた。背部にある天使を連想させるウイングバインダーと、青と白のツートンカラー……そしてG兵器同様に人の顔に近いメインカメラの額にはVアンテナがある。

“ウイングゼロ”…………

”XXXG—00W0 ウイングガンダムゼロ”（EW）”……それを見た途端、ショウマは自身の……言わば前世の記憶を思い出す。かつて自分は前世で命を落とし、新たに転生する際に頼んだ特典……その一つがこの廃棄資源衛星とウイングゼロだ。間近でウイングゼロに興奮するショウマだったが、ウイングゼロの隣に赤い機体があるのを確認する。

「オイオイ！まさかエピオンまであるのかよ……この2機だけで、世界滅びそうだな」

ウイングゼロの他には、”OZ—13MS ガンダムエピオン”まで存在していた。しばらくウイングゼロとエピオンに見惚れていたショウマだったがひとまずアーケンジエルと合流する為、艦が今何処にいるのか探す。

「この進路だと、アルテミスに向かうか……」のまま資源衛星の中にいてもいいが、クリスが心配だな」

脳裏に幼なじみのクリスが過る。ハーフコーディネイターという理由でイジメられていたショウマは一時的に人間不信に陥っていた。だがそんな時に助けてくれたのがクリスだ。クリスとは幼なじみ……だからこそ放つておけない。

「資源衛星を途中で捨てて、ブリッツで合流するか……じゃないとエネルギーが持たないし……」

目的地までの間、ショウマはブリッツの補給を済ませると無重力に身を任せて眠りに着こうとした。だがその時、敵を知らせる警告音が衛星内部全域に響き渡る。巨大ウインドウが表示され、ショウマはその映像を見て驚愕する。

「なんだよありや!? それにあのガンダム……見覚えがある！」

黒い3機のジンを率いる黒いガンダムがこちらに向かつて来る映像……しかしその黒いガンダムにシヨウマは見覚えがあった。補給を済ませたシヨウマはブリッツに乗り込む。ブリッツは廃棄資源衛星内部にあつたバズーカや実体剣を装備して出撃する。

『ブリッツ?……確かに、原作だとニコルのやつだが……』

「資源衛星には近寄らせない！」

ブリッツはバズーカを構えた——そしてこちらに向かつて来る黒いガンダムは右手に持ったドッズランサーを構える。

PHASE—07 「ビシングデイアン」

「（俺はこいつを知ってる……間違いない、こいつは！）」

ブリツツの目の前にいる黒いガンダム……ショウマは思い出した。目の前にいる黒いガンダムは”機動戦士ガンダムAGE”に登場するガンダムAGE2の改修された姿、ガンダムAGE—2 ダークハウンドである。

『お前は何者だ！』
「話すつもりはない！」

ブリツツはグレイプニールを射出するがダークハウンドもアンカーを射出し、双方ともワイヤーが絡まる。ダークハウンドの性能を知っているショウマはすぐにグレイプニールを切り離すと、ダークハウンドに近づく。

『何者だ！』

『お前こそ！ダークハウンドは本来存在しないはずだが？』

『ほう。ダークハウンドを知っている……ならお前も俺と同じか！』

『転生者か』

ブリツツとダークハウンドは互いに見合つたまま動かない。その後ブリツツはトリケロスに内蔵されているビームライフルを撃つ。それをなんとか防御したダークハウンドはドッズランサーを振り下ろす。

「ちい！」

『なかなかやる！お前等は先に戻れ！こいつは俺がやる』

『『はつ！』』

後方で待機していた黒いジン3機はそのまま下がる。ダークハウ

ンドはブリッツを追い込んでゆくが、ブリッツは隙を狙いランサー
ダートを1本だけ放つ。しかし射出したランサーダートは回避され
る。

「まだやるか！」

『待て！』

「……！」

『……話をしないか？』ここで倒すにはなかなか惜しい。どうだ？そち
らが武装を解除してくれるなら、俺も攻撃はしない……同じ転生者同
士、協力しないか？』

「…………はあ。分かつたよ」

ブリッツはバズーカと実体剣を捨てる。その後、ダークハウンドに
先導されたショウマはダークハウンドを操る彼の戦艦”バロノーク
”の中へ入る。格納庫へ入るとそこには先ほどの黒いジンや”シャ
ルドール”まである。

「キャプテン！そいつはさつきの奴じゃないですか！捕獲したんです
かい？」

「いや。事情が変わつてな。さあ付いてこい」

「あ、ああ」

バロノークの乗組員達に好奇な眼差しで見られながら、ショウマは
ダークハウンドのパイロットに連れられてある部屋を案内された。
「さて、自己紹介しよう。俺は宇宙海賊ビシディアンの首領、アセム・
アツシユ。君は？」

「ショウマ・イズル……」

「ならショウマか。ショウマ……あの廃棄資源衛星……君のか？」

「ああ。あの廃棄資源衛星にはウイングゼロとエピオンがある……」

「ゼロとエピオン……なるほど。転生の際に頼んだ特典か何かだな
？」

「……その通りだ」

ショウウマとアセムはそれから互いに自身の素性を明かして、この世界で生まれてから現在の経緯を話す。

「ショウウマはあの廃棄資源衛星をどうするつもりだ？連合やザフトに見つかればかなり厄介だぞ」

「そこなんだよ。あのままいるのはいいが、アークエンジエルには仲間がいるし……放つてはおけない」

「……ふむ。ならショウウマ、あの廃棄資源衛星は俺に任せろ」「なんだと……」

「なあに、別に何かに利用するつもりはないさ。ただ、もしウイングゼロとエピオンが連合とザフトのどちらかに渡ればパワー・バランスが乱れるだろう……そうならない為に事情を知る俺がいれば、問題はないだろ？」

「確かに……ならアセム、頼めるか？」

「ああ。よし……なら、ひとまず君をアークエンジエルまで届けよう。衛星は仲間に任せる」

「すまないな」

「いいさ。困った時はお互い様だ」

しばらくアセムと話したショウウマ。やがてアークエンジエルまで送り届けることを協力したアセム。ストライダー形態のダークハウンドにブリッツが乗る。

「しばらくの間、資源衛星を頼む」

『了解だキヤブテン！』

「アセム・アツシユ、ダークハウンド出る！」

ブリッツを乗せたダークハウンドはハイパー・ブーストでアークエンジエルが向かうであろうアルテミスへ向かう。

PHASE-08 「アルテミス襲撃」

ハイパー・ブーストを使ってアルテミスまで近づいたシヨウマ。アークエンジエルとコンタクトを取ろうとしたが応答がない。幾ら試してもアークエンジエルからの応答はなく、シヨウマは次第に焦る。

「どうしてだ!? 応答してくれ!」

『…………アルテミス…………そこにアークエンジエルはいたんだよな』

「そうだが……」

『ならまずいぞ。アルテミスは確かユーラシアの所属だ……だとすれば』

アセムがシヨウマに話す最中警告音が互いのコクピット内に鳴り響く。どうやら近くにいたザフト……それもクルーゼ隊という厄介な部隊が待ち伏せしていた。ブリツツとダークハウンドにデュエルとバスターが迫る。

『ほう、見掛けないMAがあるな……なら一緒に落ちろ!』

『グウレイト!』

「お前等に構つてる暇はねえんだよ!」

砲撃するバスター。それを交わすダークハウンドは次第にアルテミスへ迫る……シヨウマは引き続き通信を繰り返すが応答はない。シヨウマはダークハウンドから離れて、単身2機に挑む。

「毎度毎度つ!」

『ちい! 早い!』

”ディアツカ・エルスマン”の駆るバスター・ガンダムが砲撃を繰り返す。ブリツツはそれをギリギリ回避しながらグレイプニールを射

出。グレイブニールがバスターにぶつかるが、次にデュエルが迫る。

『たかがナチュラルがアアアアアアアアアアアアアア!!』

「このオオ!!」

”イザーク・ジユール”の駆るデュエルがビームサーベルをブリッツに振り下ろす。一方でダークハウンドのコクピットではアセムがコンソールを操作しながらアルテミスのシステムにハッキングしていた。

「そういうや、あのガルシアのおっさんには随分酷い仕打ちされたからな。ちょっと仕返しだ」

アセムはそう言うとシステムを支配下に置き、アルテミスの全方位光波防御帯を解除した。システムは戻した後、アセムも戦闘に参加する。ダークハウンドはブリッツを助けると反撃に出る。

『なんだありや!?』

『見た目はGに似ているが……!』

「しつこい！」

『厄介なもんだ!』

ブリッツがライフルを向ける——しかし新たな機影が姿を現す。それはニコルの駆るシグーだ。シグーも加わり、ショウマとアセムは押されてゆきアルテミスの中へ。

『ディアツカ!ニコル!両方からの攻撃だ!』

『OK!』

『はい!』

デュエルはビームライフルでアルテミス内部を攻撃しながらダークハウンドに迫る。ダークハウンドはアンカー射出。デュエルに巻き付けて、そこに電流流し込む。

『があああああ!!!な、なんだ!?』

「海賊を舐めるなよ」

『そらアア！落ちろオオ！』

『逃がさない!!』

『いい加減に！』

ブリッツはランサーダートを放ち、シグーのメインカメラを半壊させると蹴りをお見舞いする。だが背後にバスターが迫る。

「なに……！」

『もらつた！』

「ショウマアアアアアアアア!!!」

バスターからの砲撃が繰り出されようとした時、キラのソードストライクが助けに入る。バスターを蹴り飛ばし、ソードストライクはブリッツを連れてアーケンジエルへ向かう。

「すまないなキラ、助かつた」

『ううん……ショウマこそ、無事で良かつたよ』

「キラ……」

アルテミス内部が爆発を起こす中でアーケンジエルとストライク・ブリッツは脱出する。それを見届けたアセムは密かに撤退していく。イザーク達もまたアルテミスから脱出し、アーケンジエル追跡の為に艦へ戻る。

PHASE—09 「宇宙の傷跡」

「このバカヤロオオオ!!!」

「ぐふつ!?」

「アタシがどんだけ心配したと思つてんだ!!!」

「ちょっとクリス！ それぐらいにしないと、ショウマが死んじやうよ!?」

アークエンジエルへ再び帰投したショウマを待つていたのはクリスの鉄拳。涙を流しながら彼女に殴られたショウマは困り顔。キラガクリスを宥め、ショウマはナタルに呼ばれて部屋へ入る。そこにはマリュー・ムウもいた。

「さて、ショウマ・イズル。单刀直入に聞かせてもらおう……今まで何処にいた？ ヘリオポリスの崩壊後、君の捜索をキラ・ヤマトにお願いしたが、君を見つけられなかつた。しかし、あのアルテミスで君はいきなり現れた」

「…………どうしても話さなきやダメですか？」

「悪いな坊主。一応、君の乗るブリツツは軍の最高機密なんだ……分かるな？」

「……分かりましたよ……」

ムウにそう言われ、ショウマは自分がブリツツと共に宇宙海賊ビシリアンに拾われ、助けられてアルテミスまで送り届けつてもらつたことを話す。マリュー、ムウは驚き、ナタルは席を立ち上がる。

「ビシディアン……それは本当なのか!?」

「ビシディアン……宇宙海賊か」

「聞いたことがあるわ。地球軍、ザフトにも属さない私設武装組織……地球軍内部では彼等は危険視されているわ……ショウマ君、ビシ

「ディアンに保護されただけなの? ブリッツは?」

「その事なら、心配なく。一応貴方達の物ですから、触れさせていません。疑うのであれば調べてもらつても構いません」

「「……」

ショウマの言葉にマリュー・ムウ・ナタルの三人はひとまずショウマを信じることにした。ショウマ&ブリッツが帰還を果たしたが、アークエンジエルはあるピンチに陥っていた。それは補給だ……アルテミスでは色々あり補給を受けられずにいた。だがムウはある場所に目を付けていた。

「デブリベルト……まさか」

「ああ……その通りだ」

「(デブリベルト……嫌な予感がする……)」

「……」

アークエンジエルは今デブリベルトに向かっていた。ブリッジではキラ達やクリスが暗い表情になる。レイラもまた、下へ顔を俯かせる。やがてアークエンジエルはデブリベルトへ――ストライクとブリッツがアークエンジエルから出撃する。

「これは……」

「酷いな……つ」

キラとショウマが目にしたもの……それは地球軍の核によつて破壊されたユニウスセブンの残骸。色々な物が漂流しており、中には人もいた……衝撃の光景に思わず吐き気を押さえるショウマ。

「(マリューさん達が悪い人じやないのはわかる……けど……こんなのがつて……ねえよ! 何が蒼き清浄なる世界の為だ……!!)」

今まで外の世界を知らなかつたショウマにとつて目の前の光景は過酷だつた。ひとまずストライクとブリッツは水があるのを確認すると一時アークエンジエルへ。失くなつた者達への追悼として、ショウマやクリス、トール達は折り花を造ると再び出る。

「行くぞ……キラ」

『うん』

ストライクとブリッツは折り花を手放す……ゆっくりと散らばつてゆく折り花を見届けたショウマとキラは黙祷を捧げる。マリュー達もブリッジで黙祷を捧げた……それからトール達は補給作業に入る。万が一のことを考え、キラは周りを見張る。ショウマもまたブリッツに搭載された”ミラージュコロイドステルス”を使って機体の姿を隠す。

「(今のところ異常は……ん?)」

ショウマの視線の先に强行偵察複座型のジンがいた。そのジンは何かを探しているようで、辺りを見渡していた。

「(そのままいけ……こんなところで戦闘なんて出来るもんか………
気付くなよ)」

出来ればそのまま去つて欲しい………こんな場所で戦闘など出来ればしたくない。しかしショウマの願いは呆氣なく叶うことなく、トルやカズイ達が乗るミストラルに近づく。

「くつそ——!!」

『馬鹿野郎!!なんで気付くんだよ!!うわあああ!!』

「キラーくつ!!」

キラのストライクがビームライフルを撃つ。左腕を破壊するも、複座型のジンはそれでも攻撃を続けようとした。だが、ミラージュコロイドステルスを解除したブリッツも右腕と両脚をトリケロスで破壊する。

「はあ……はあ……はあ……」

『あ、ありがとうショウマ……』

「気にすんな……こんなところで、むやみにビームライフルを使うな……いいな」

『……うん……っ！ ショウマ、あれ！』

「……救命ポッド……だと？」

ストライクとブリッツの目の前に救命ポッドが漂っていた……ショウマはそれを回収する。やがて作業が終わり、ショウマ達はアーケンジエルへ戻る。格納庫に集まつた一同……アーケンジエルの整備担当である”コジロー・マードックが端末を搜索して、救命ポッドを開ける——するとポッドから丸いピンクのロボット？と三人の少女が出てきた。

「ようやく……出られたわね。はあ、早く帰つてシャワー浴びたいわ！」

「うふふ、シェリルさんつたら……」

「全く……あら？ 貴方達……ザフト……じやないわね」

救命ポッドから出て来たのは”プラントの歌姫” ラクス・クライイン”と”プラントの妖精” シェリル・ノーム”と”プラントの戦乙女” マリア・カデンツアヴナ・イヴ” だった。

PHASE—10 「大天使に舞い降りた歌姫達」

アークエンジエルに三人の歌姫が舞い降りていた頃、キラの幼なじみでGAT-X303イージスのパイロットであるアスラン・ザラはラウル・クルーゼと共にプラントへ査問会の為に帰還していた。やがてそれが終わり、アスランはヴェサリウスへ乗艦しようとしていた。

「アスラン」

「つ!? 父上……！」

最高評議会の一員で父親であるパトリック・ザラが。アスランは驚くも敬礼する。

「ラクス嬢のことは聞いているか?」

「?……え、何も」

「追悼式典の準備のために、ユニウスセブンに向かっていた観察船が消息を経つた」

「え……それは!」

「ラクス嬢の他にも、マリア嬢とシェリル嬢も乗っていた」「お二人もですか……」

自身の婚約者でありプラントでは三大歌姫の一人であるラクス・クラインが行方知らず。更にはマリア・カデンツアヴァナ・イヴとシェリル・ノームまでがいない。

「ラクス嬢はもちろんだが、二人も行方知らずだ……分かるな? あとは頼んだぞ」

「……はつ」

パトリックはそれを告げた後、その場を後にする。ラクスとマリ

ア、シェリルが行方知らず……不安を抱きつつもアスランは彼女達の探索の為にヴェサリウスへ乗り込む。

「（なんである三人が！？……よりもよつて、何故貴女がいるのですか
シェリル！）」

アークエンジエル内ではプラントの三大歌姫の身柄をどうするかで話し合いが行われていた。そして民間人として素性を隠しているレイラはイレギュラーな事態に少々パニックを起こしていた。レイラは幼少期にラクス・シェリル・マリアとよく遊んだ仲だ。特にシェリルとは大が付く程の親友の関係……今現在彼女はザフトであることを隠してアークエンジエルにいる。もし彼女達に素性がバレ、ザフトだと知られたらどうなるか……

「（なんとか会わないようにしないと……）」

現在3人は部屋にいる……取り敢えず制限が設けられている分なんとか身バレは防げるだろうとレイラは考える。

「嫌よ！ 嫌つたら嫌！」

「いい加減にしろよ！ あれも嫌、これも嫌って、ワガママ過ぎだ！」

「まあまあクリス」

食堂から言い争う声が聞こえた為、レイラは気になり中へ。そこではクリスとフレイが互いににらみ合い、口喧嘩していた。

「どうかされたんですか、ミリアリアさん？」

「え？ うん、まあね」

ミリアリアによればラクス・シェリル・マリアに食事を届ける為にクリスとフレイが搬送係になつたのだが、コーディネイターを嫌うフレイはそれを嫌がる。クリスはそんなワガママなフレイに苛立つ。

「コーディネイターの所に行くなんて嫌よ！恐くて、たまつたもんじゃないわ！」

「人が下手に出でりや、ワガママばかり言いやがつて！コーディネイターとかナチュラルとか関係ない……アソツ等だつて生きてるんだ！アタシ等は同じ人間——『なわけないじゃない！』つ！」

「コーディネイターなんて！『コーディネイターがどうかしたの？』つ！？」

クリスとフレイが言い争い、キラとショウマも食堂へ入る——そして、クリスとフレイの間に割つて入つたのはプラントの妖精ことシェリル・ノームであつた。

「ちよつと嫌だ！なんでザフトの子が出歩いてるのよ!?」

「さつきから何言つてるのよ……物陰から聞かせてもらつたけど、アンタみみたいに偏見を持つ人がいるから、戦争は終わらないのよ。益々激化するだけ」

「――――」

シェリルの言葉に食堂にいるキラ達は黙るしかなかつた。だが、フレイがまだ何か言うおとしていたが、それに構わずシェリルはニコニコしながらレイラの肩を叩く。

「なにしてるの？レ・イ・ラ♪」
「……あ、あはは……」

「（知り合い？）」

いたずらっ子のような笑みを浮かべるシェリルにレイラは困った
ように笑う。ショウマはそんな二人に首を傾げる。

PHASE——11 「キラと妖精」

パニックになるフレイをよそに、キラはシェリルの手を引いて食堂の外へ出た。ショウマはイライラしているクリスを宥める。レイラはひとまずキラ達の後を追おうとした。

「待つてレイラさん」

「ショウマさん……」

「聞きたいことがあるんだけど……」

ショウマがレイラを引き留める一方で、キラはシェリルと奥の部屋の扉の前に来た。

「はあはあ、勝手に出たらダメじゃないですか……」

「だつて暇なんだもの」

「……その……勝手に出歩くと、さつきみたいなことになりますから。僕達……コーディネイターを嫌う人だつているから」

キラは下に俯きながらそう言つた。フレイ・アルスターは酷くコーディネイターを嫌つていた。彼女のコーディネイター嫌いはブルーコスマスの一員である父親が影響している。最初こそ、ガレッジのアイドルである彼女に好意を寄せていたキラだがアルテミスや先程の食堂でのフレイの言動には嫌気が差していた。

「だから……」

「……まあ、こんな」時世ですもの……仕方ないわ。ところで貴方……名前は?」

「え……」

「私はまだ貴方を知らない。私はシェリル・ノームよ……さあ、貴方の名前を教えて?」

「キラ……キラ・ヤマトです」

「キラ・ヤマト……いい名前ね！氣に入つたわ！」

「え、ちょ!?」

シェリルはキラの腕に抱き付く。ほのかに香る女の子の匂いと、彼女のグラマーな体型もダイレクトに伝わった為に、キラは顔を赤くする——そんな二人の元にもう一人少女が現れる。

「あら、ここにいましたのねシェリルさん」

「あらラクス。マリアは？」

「マリアさんなら部屋で本を読んでますわ……うふふ」

「……そうだキラ。私の歌、聞いてみる？」

「え？」

「あらあら、歌を歌いますの？ならわたくしも」

「ならラクスも！そうと決まれば、行くわよ！」

「ええ!？」

キラはシェリルとラクスに連れられて部屋へと連行？される。一方でアークエンジェルは先遣隊と合流を果たそうとしていた。しかし運悪くザフトが襲来する。ザフトMSの中にはアスランのイメージスもいた。ショウマはパイロットスーツを着込み、格納庫へ。

「整備よし、システムOK……ヨシ（現場猫）」

「ショウマの坊主、何奇妙なポーズしてんだ？」

コクピットを覗くマードックは不思議そうに首を傾げる。見られていた……そう思うと顔が赤くなりそうだが、ショウマはクールにポーカーフェイスで決める。

「たく！毎度毎度、ご苦労なことだ！ショウマの坊主、先に俺達で出撃するぞ！」

「はい！……あれ……ムウさん、キラは？」

「それが来ないんだよ……まあ、何時もあの坊主に頼りっぱなしだつ

たからな、たまには俺もカツコいいとか見せなきやな」

「大丈夫ですよムウさん。アークエンジェルも、ムウさんもやらせませんから」

「たく、生意気」

出撃前にムウがブリッツのコクピットを覗く。短い間ではあるものの、アークエンジェルのクルー やムウと打ち解けているショウマは艦やムウを守ると言つた。ムウからシ_一頭を激しく撫でられたショウマは死ぬんじやねえぞと言葉を貰つた。

『ショウマ、今いいかな』

「サイ……どうしたんだ？」

『先遣隊にはフレイのお父さんもいるんだ。出来るだけ気に掛けて欲しい』

「…………あいよ」

フレイの父親が先遣隊にいる。ザフトと戦う中で、それも気に掛けないとならない。不本意だがやるしかない……それもサイの頼みであれば。ショウマとムウは先に出撃する。

「ショウマ・イズル、ブリッツ行きます！」

「ムウ・ラ・ブラガ、出るぞ！」

アークエンジェルから出撃したブリッツとメビウス・ゼロ。アークエンジェルから砲撃が繰り出される中で、ザフトの襲撃を受けていた先遣隊——ショウマは地球軍の艦を通り抜けて、イージスに迫る。

「X207！ストライクじゃない……！」

「イージスか！」

イージスとブリッツはビームライフルを撃ち合う。アスランはブリッツの動きに違和感を覚える。ナチュラルでは出来ない操作技術……ブリッツのパイロットは恐らくコーディネイターだと確信した。

「キラの他にもコーディネイターが……！」

「いい加減に！」

ショウマのブリツツが——アスランのイージスが互いにぶつかり合、激しく戦う。

PHASE—12 「駆け抜ける嵐」

「なかなかやる！」

「さすがは正真正銘のコーディネイターか。やつぱり、半端もんじや足止めにもならないか！」

爆散する地球軍の戦艦。それに構わずイージスとブリッツはビームライフルを撃ち合いながら戦闘を継続する。ブリッツはランサー・ダートを放つが、イージスはMA形態へ変形すると、スキュラでランサーダートを破壊する。

「……！」

焦るのも束の間、ショウマとアスランが互いを警戒する中、アーヴエンジエルからエールストライクが出撃する。シェリルとラクスから解放されたキラは少し疲れているが、シェリルとラクスの歌声に癒されていた。

「（やらなくちゃ……あれは……ショウマ、それにアスラン！）

『もう1機いたか！』

『叩くぞ！』

「つ！邪魔をしないでくれ！」

ストライクに気付いた2機のジンは重斬刀を構える。一方でアーケンジエルもまた襲撃に合っている先遣隊を助けるのに必死だ。マリューとナタルが交互に指示を出しながら、砲撃を繰り返す。

「ヴェサリウスよりミサイル！こちらに向かつて来ます！」

「ブリッツ、ストライク、ゼロは！」

「ブリッツとストライク、両機共に敵MSと交戦中！……メビウス・ゼロ被弾あり！帰投します！」

マリューの中で次第に焦りが増してゆく。次々と撃墜されてゆく先遣隊の艦……頼りになるブリッジとストライクは交戦中、ゼロは被弾……状況は酷くなるばかりだ。そんな時、ブリッジにフレイが入つて来た。

「パパは？ パパの船は！」

「っ!? 今は戦闘中です！ 非戦闘員はここから出て！」

マリューがフレイにそう言うが彼女はそれに構わず動こうとする。CICに座るサイは彼女をブリッジから出そうとする。

「フレイ、今ここにいちゃ駄目だ……一緒に出よう」

「でも！ キラや、あのショウマつて子は何してるのよ!?」

「キラもショウマも戦つてるよ……だから」

「離して！ 離してよサイ！」

ブリッジから出るフレイ。サイは彼女をブリッジから出すと、CICへ戻る。フレイは父親の安否が気になり不安しかない……だがそんな時だ……歌が聞こえたのは。恐らくはあの3人の中の1人……ラクスが歌っている。

「そうよ……その手があるじゃない」

《ショウマ！ イージスは僕が！ ショウマはアークエンジェルの方を！》

「了解だ……キラ、頑張れよ」

↑——うん』

イージスと交戦していたブリッツはストライクと交代して、アーヴエンジエルと先遣隊の艦に取りつこうとするジンにビームサーベルで応戦してゆく。状況を知ろうとアーヴエンジエルに通信を繋ぐショウマだつたが……

『この子を殺すわ！パパの船を撃つたら、殺すってそう伝えて！』
『やめるんだフレイ！』

『（あのワガママ娘……いらんことしたな……くそ！）』

どうやらアーヴエンジエルのブリッジもトラブルに見舞われていた。ブリッジではマリユー・サイがフレイを落ち着かせようとするが、フレイは聞く耳持たずでラクスを殺すと言ふことを聞かない。

「いいから早く！じゃないと――『動かないでください』ひい!?」
「「「「……!」」」

「ラクス様を離してください、フレイ・アルスターさん……！」
「レイラさん……貴女……」

そんな身勝手なフレイにレイラは我慢出来ずに懷に隠した拳銃を構えた。ブリッジ内が凍り付き、ラクスは心配そうにレイラを伺う。ブリッジが静まり返る中で、ヴエサリウスが主砲でフレイの父親が乗っているモントゴメリを撃ち抜いた。

「あああ……あアア……！」
「フレイ！」
「ちい！」

フレイが錯乱する中で、ナタルはコンソールを操作してザフトに通

信を繋いだ。

「ザフト軍に告ぐ！」ちらは地球連合軍所属、アークエンジエル。当艦では現在、シーゲル・クラインの令嬢、ラクス・クラインを保護している！及び、シェリル・ノームとマリア・カデンツアヴナ・イヴも保護している！」

ナタルの通信にショウマ・キラ、ザフト軍の戦闘は止まる。

PHASE—13 「分かたれた道 1」

ラクスを人質にと「ナタルの声明によりアーケンジエルとザフトの戦闘は一時停止することとなつた。フレイの父が乗つていた艦は沈められ、また窮地に立つアーケンジエル。キラはストライクから降りるとムウに駆け寄る。

「これはどういうことなんですか!?あんな民間人の子達を人質にとつて、脅して逃げるのが地球軍なんですか!」

「どうもこうも、そういう情けないことしか出来ないのは俺達が弱いからだろ?艦長達を責める権利は俺達にはない」

「けど!」

「キラ止せ!」

ムウにまだ反論しようとするキラにショウマが割つて入る。

「キラ、ムウさんだつてあんな事したくないって思つてるんだよ……マリューさん達だつて!……大体、なんでラクスさんがブリッジにいたか分かるか?」

「え……」

「あれはフレイ・アルスターがやらかしたんだよ」

マリュー達がラクスを人質に取つたと勘違いしていたキラはショウマの言葉に耳を疑う。ショウマはブリッジの通信の向こうでフレイがラクスを殺すと聞く耳持たず好き勝手言つていた事を話す。

「それじやあ……」

「ああ。あのアホ娘のせいだよ……だが窮地に立つたアーケンジエルはそれで難を逃れたが、ザフトはまた仕掛けて来る」

「…………」

「取り敢えず戻ろう」

ショウマはキラを連れてデッキへ向かう……すると前方にフレイの泣き叫ぶ声が響き、サイが必死に彼女を宥めている姿があった。キラはフレイを見た途端にどうしていいか分からず、下へ俯く……ショウマは気にせずサイとフレイの側を通ろうとした。

「待ちなさいよっ!!!」

「…………?」

「なんで……なんでパパの船を助けなかつたのよ!? なんでよ!? ねえ!
…………」

「うるさいな」

「…………!」

「こつちだつて必死にやつてんだよ!! けどな、アーチエンジエルには俺やキラ、ムウさんしかいないこの状況で、ザフトは果てしない戦力があるんだぞ! 一々お前の文句に付き合つてる暇はないっ!」

「何よ…………この人殺し! パパを殺した偽善者!!」

「フレイっ!! ……ごめんショウマ……」

フレイがショウマに掴み掛かろうとするがサイがそれを止める。ショウマはそのままある部屋へ向かう。キラはその場にいたもののサイが静かにサインを送り、キラもその場を後にする。

薄暗い柵が付いた部屋に一人の少女がいた。それは民間人として振る舞っていたレイラ・マルカルだった。レイラはブリッジで拳銃を突き付けた一件で檻へと入れられていた。更にはラクスを知る様子から、ザフトだと疑われていた……

「…………」

「レイラさん……」

「ショウマ……さん……」

「…………一応聞いたよマリユースさんから…………」

「そうですか…………」

部屋に入つて来たのは黒いパイロットスーツ姿のショウマだつた。ショウマは周りを確認して床に腰を落とす。

「…………レイラさん……貴女は……」

「ショウマさんが考へて いる通りです…………私はザフトです…………」

「そつか…………」

「…………何とも思わないのですか？」

「何が？」

「だつて…………私は…………貴方やクリスさん騙したんですよ？…………ですか

…………」

「別に何とも思わない。俺はただレイラさんが無事なのを確認しに来てだけさ」

自身の素性に対しても気にしないショウマに何を言つて いるんだ……？とレイラはそう思う。普通ならば怒りをぶつけるのが基本だ。だがショウマはそれをしないどころか自身の無事を見て、ニッコリと笑みを浮かべるだけだつた。

「貴女がなんでザフトに入つてるのか…………そこまでは聞きましたよ…………んじや」

「…………ショウマさん……」

レイラがいる部屋を後に、翔真は自室へ戻る…………最初に視界に映り込んで来たのはクリスがメイド服を着て いる姿と写真を

取るマリア……更には何故かキラがラクスとシェリルに女装させられていた。

「し、ショウマ!?み、見るな！」

「ふふつ、恥ずかしがつている姿もいいわね。貴女、なかなかいい素材よ」

「なにがだよ!？」

赤面するクリスをよそに、マリアは写真を取り続けている。

「や、やめてください！……こ、こんなことされたら……」

「あらあら……キラ様、それは反則ですわ！」

「私達より可愛いなんて……反則よキラ・ヤマト!!」

キラはキラでウイッグを付けて、ミリアリアが着ている地球連合軍の軍服（女性服）を着させられて涙目になつていた。翔真の部屋はかなりカオスな状況である。

「(しかしどうしたもんか……ラクスさん達もそうだが、レイラさんも……)」

PHASE—14 「分かたれた道 2」

ラクス達が人質に取られていると思つてゐるザフト側は必ず襲撃してくるとショウマは予測していた。ショウマはザフト側に彼女達を返しようと見え、行動を開始する……身柄を拘束しているレイラもザフト側に返す為に、ショウマは先に彼女を助けることにした。

「…………」

「——眠れないのか？レイラさん」

「ショウマさん……！どうして！」

「しつ……今は黙つて付いてきて」

檻の鍵を解除してレイラを解放したショウマはラクス達の部屋を目指す。

「ショウマさん、一体何を……」

「あんたやラクスさん達をザフト側に返すんだよ」

「…………」

「どつちみち、このままだとアーケンジエルはピンチのままだ。いつ落とされても可笑しくないからね……それに可愛い貴女を放つてはおけないからな」

「ショウマさん……貴方は変わつてますよ……」

警戒しながらラクス達の部屋を目指すショウマ。すると前方からキラがラクス・シェリル・マリアを連れて走る姿が見える。

「ショウマ！……それにレイラさんも！」

「キラ……まさか」

「…………うん」

どうやらキラも同じ考えらしく、ショウマとキラは結託して彼女達を連れて格納庫を目指してゆく。怪しまれないようによつくりと進んでゆく。

「貴方達、こんなことして何になるというの？」

「え……」

「マリアさん……」

格納庫を目指す道中でマリアがそう口にした。ザフト側に自分達を返してくれるのは嬉しいが、しかしキラやショウマにメリットがないとマリアはそう思つた。マリアの問いに返答を迷うキラだがショウマは答える。

「何もないですよ……ただ、あんた達は歌姫である前に民間人だ。それを人質にするつてのは嫌だからな……キラもそうだろ？」

「うん……」

「そういう事さ」

「…………なるほど。でも、一つ忠告しておくわ。いづれ貴方達の優しさは自らを苦しめるだけよ……それだけは覚えておいて」

マリアの言葉……その言葉に重みがあるのを感じたキラとショウマはひとまず頷きながらも、今は彼女達を返還する為に走る。

「ショウマ、さすがにこの人数だと誤魔化し切れないよ！」

「――心配すんな。こんな時の為にある助つ人を呼んである」

「え……それって……」

「連合やザフトにも属さない、スペースパイレーツにな」

アークエンジェルの後方にヴエサリウスなどの艦が動きを止めている中で、「隻の戦艦が近づいていた。黒くペイントされた戦艦”バロノーク”はアークエンジェルとヴエサリウスの間に割つて入つて

来る。

「これは……艦長！アーケンジエル後方に”ビシディアン”です！」

「なんですって！……何故宇宙海賊がこんな所に！」

アーケンジエルのブリッジが慌ただしくなつていて、ヴエサリウスのブリッジでも同様だつた。

「クルーゼ隊長！奴等は！」

「ちい……お邪魔虫とはまさに奴等の事だ……構わん！MSを出撃させろ！奴等は撃墜しても構わん！」

想定外の事態にラウは舌打ちする。足付き……アーケンジエルを追いかけている中でのビシディアンの出現。ヴエサリウスからアスランのイージスとジン数機が発進する。バロノークからも黒いジン4機が出撃する——そして、ビシディアンの首領であるアセムもまた、ダークハウンドで出撃する。

『気を付けるアスラン！あの未確認MSは恐らくビシディアンの首領が乗っている。本気で掛かれ！さもなくば、殺られるぞ！』

「はつ……宇宙海賊……そんな奴等に！」

「G A T — X 3 0 3 イージスか……！」

ラウの警告を聞き、アスランはダークハウンドに迫る。一方でアーケンジエルでも出撃準備に入る。その際にラクス達も連れてショウマとキラはそれぞれ機体に乗り込む。

「オイ!!何してる!!」

「すまないなマードックさん……今は黙つて見ててくれ！」

ショウマはレイラとマリアの二人と共にブリッツに乗り込む。キラはラクスとシエリルと共にストライクへと乗り込む。マードックからキラ達が歌姫達を連れて出撃しようとしていることをナタルは知り、二人に通信を繋げた。

『キラ・ヤマト！ ショウマ・イズル！ 何をするつもりだ！』

「わりいな。けど……」

「僕達はこんなこと望んじやいないんだ……」

カタパルトに入り、翔真のブリッツが先に発進する。そしてキラのストライクもエールストライカーを装備して発進する。今アーヴィングエルの後方ではビシディアンのMSとザフトのMSが戦闘を行っていた。

「キラ……イージスがいる……あとは頼めるか」

『うん。さあ早く』

ストライクが近づく。ショウマはコクピットを開けるとレイラとマリアをストライクの方に行つてくれと誘導する。

「ショウマさん……ありがとうございます……でも貴方は優し過ぎます……」「確かにね……でも、貴方のような人がこの戦争を終わらせることが出来るのかもしれないわね」

「え……」

「……気にしないで。ただの戯れ言よ……」

マリアとレイラはストライクの掌に乗る。そしてストライクはイージスの元に向かう。そしてイージスと戦つていたダークハウンドがブリッツに迫る。

『よつ……全く……無茶を言つてくれたな』

「仕方ないさ。こんな時じゃないと、色々面倒なんでな」

ショウマとアセムは互いに戦う素振りを見せる——一方キラはアスランの操るイージスの元に来ていた。

「キラ……」

「キラ様……」

「大丈夫……もし……もしアスランなら」

ストライクはイージスの前で止まる。イージスはシールドを構えてビームライフルを構えた。キラはイージスのパイロットがアスランだと確信すると通信を繋げた。

「アスラン……ザラ……だな」

『————ああ……つ！人が乗っている！』

「今……コクピットとストライクの手にはラクス・クライン嬢、シリルさん、マリアさんとレイラさんがいる」

『なんだと……どういう真似だキラ！』

「待つてくれアスラン……彼女達を……彼女達を連れて行つてくれ！」

『な、に……』

キラの駆るストライクはビームライフルを手放し、攻撃の意志がない事を見せる。アスランはそんなキラの行動に自らも武装を解除してコクピットを開いた。

「ここにちは、アスラン……うふふ」

「ラクス……」

「さあ行つて……シェリルさんや一人も」

「はい……ありがとうございますね、キラ様」

「キラ……短い間だつたけど楽しかったわ。また会える？」

「シェリル……さん……」

「もしさまた会えたら、私のコンサートに招待してあげるわ！……私の歌を一杯聞かせて上げるんだから！」

「…………はい」

「だからそれまでは生きて……それまで、これを持つていて」

「シェリルさん……」

シェリルは自分の名前が刻まれたドッグタグをキラに渡した。それを渡した後シェリルもイージスの元へ。これで彼女達を返還したと、思つているとアスランから再び通信に入る。

「キラ！お前も来い！」

「つ！……アスラン……」

「お前が地球軍にいる理由が何処にある！俺達が戦う理由なんて、な

いはずだ！」

「…………そうだけど…………でもあの艦には僕の友達がいるんだ……守る為に僕はつ！」

本当はアスランと戦いたくない…………しかし彼が敵であることに変わりはない。アークエンジエルには工業ガレッジで出来た友達や同じモビルスーツのパイロットであるショウマもいる…………自分だけ、アスランと戦わずに逃げることはしない…………キラは精一杯にそう言った。

「…………そうか…………なら…………次戦場で会った時は俺がお前を討つ！」

「「「…………！」」」

「…………僕もだ……アスラン……」

アスランの決意…………ラクス達は複雑な表情を浮かべる。キラはそのままイージスから離れてゆく。アセムはタイミングを見計らい、戦闘区域から離脱する。

『坊主共！ひとまず戦闘は終わった。宇宙海賊のおかげでこちらはなんとか無傷だ……だが、帰つたらありがたい説教だからな？』

「は、はい……まあ当然か」

「ははは……ショウマ、僕もいるから……ね？」

ストライク、ブリッツ、メビウス・ゼロはアークエンジエルへ帰還する。そしてビシディアンとの戦闘で戦力を失つたザフト軍もひとまずは退却してゆく。

PHASE—15 「転生の影響／覚醒のキラ」

ラクス達を無事保護したヴェサリウス。ラクス達と共に解放されたレイラはラウからアークエンジエル追跡の任務を与えられる。休む暇もなく、レイラは気持ちを切り替えてアークエンジエルを追うガモフへ移動する。そしてレイラは新たな機体を与えられていた。

『アスラン達の機体のデータを反映させた物だ。レイラ、どうかね』
「はい……なんとかいけます……レイラ・マルカル、”ゼダス”行きます!』

GAT-Xシリーズのデータを反映させたザフトの試作型MS“ゼダス”。ジンなどで見られるデザインではなく、何処か生物的な印象を与える。造られたゼダスはレイラ機とニコル機の2機のみ。ヴェサリウスからゼダスが発進する。場所は変わり、ガモフのブリッジではアークエンジエルを追うイザーク・ディアツカ・ニコルが話し合っていた。

「月艦隊と合流する前に足付きにですか……」
「なあに、俺やイザークがいれば問題はないってね?」
「…………」
「ニコル、いい機会じゃないか。確かゼダスだつたか?あれを使える舞台が整うんだ。なら好都合じゃないか」
「そうですが……」

イザークとディアツカは艦隊と合流する前にアークエンジエルを叩くと決めていた。ニコルはあまり乗り気ではなかつたものの任務遂行の為にと出撃準備に入る。

「やれやれ、トイレ掃除とはな」

「いいじゃない。本来なら僕等は銃殺刑になつてもおかしくなかつたんだから」

「そりだけどよ……はあ」

一方、ラクス達を独断で解放した一件はナタルからお叱りは受けたものの、マリューの計らいで一応許された。しかし罰は与えられており、ショウマとキラはトイレ掃除をしていた。ようやく終わり、二人は休憩する。

「キラ……イージスのパイロットとは話せたのか？」

「…………うん。でも…………アスランは」

「アスラン……イージスのパイロットか」

「うん。僕の友達なんだ……」

キラはアスランと戦うことにまだ戸惑っていた。確かにああは言つたもののやはり友達という点でキラはアスランと戦いたくはないと思つていた。ショウマがキラに語り掛けようとした時、ザフトが現れる。艦内に放送が響き、ショウマとキラは走る。

「見つけたぜ！」

「今度こそ沈める！ニコル、レイラ……貴様等の力、見せてもらうぞ」

「言われなくても」

「（ショウマさん…………出来るなら、貴方との戦闘は避けたい……）」

ガモフからデュエル・バスターのG兵器2機とニコルとレイラのゼダスの2機。計4機はアーティジエールに接近する。アーティジエールのカタパルトデッキではストライク、ブリッツが待機していた。

『キラ、ショウマ！ザフトはローラシア級1、デュエル、バスターとアンノウン2よ！』

「アンノウン？」

「なんだそりや…………もしかして新型か…………」

ミリアリアのアナウンスが終わり、ショウマのブリッツが先に出撃する……そしてミラージュコロイドステルスを使用して姿を消す。次にキラのストライクとムウのメビウス・ゼロが出撃する。

「モビルスーツを引き離す！レイラ、足付きは任せたぞ！」

『……了解しました！』

「ニコル、ブリッツを探せ！奴もいる！」

『はい！』

デュエル・バスターはストライクとメビウス・ゼロを相手にする——一方で、ショウマはモニターに映るゼダスに驚愕していた。本来この”コズミック・イラ”にゼダスは存在その物がない。しかし目の前にゼダスは確かに存在している……それも2機だ。

「（何故あれが！……そう言えばアセムが言つてたな……）」

——俺や君のようなイレギュラーの存在で、もしかしたら何かしら変化がある可能性がある。

前にアセムが言っていた言葉がショウマの脳裏に過る。ショウマやアセム……その他の転生者の存在のせいでコズミック・イラに何かしらの変化があるとアセムは予測していたが、彼の言葉は現実となつた。

『今日は逃がさん！』

『ここで殺られてたまるかアアアアアアア!!!』

『ちい！ M Aが！』

『しつこいんだよ！』

キラやムウが必死に戦う中で、ショウマはミラージュコロイドスティルスを解除するとニコルのゼダスに近づく。

『いた！』

『よりもよつて！』

ニコル機が掌からビームサーベルを展開……そしてブリッツに斬り掛かる。ショウマはなんとか回避しながらランサーダートを放つ。しかしゼダスは高速飛行形態へ変形してブリッツを翻弄する。

『なんて性能だ……これなら、例え新兵器であろうと!!』
「ちい！早すぎて狙いが定まらない!?」

ブリッツはビームサーベルを展開してゼダスを追いかける。一方で、レイラは申し訳ないと意いつつも、アークエンジェルに攻撃する。掌からビームバルカンを連射し、アークエンジェルはダメージを負つてゆく。

「アークエンジェルが！」

『ストライク、落ちろ！』

キラはアークエンジエルを向かおうとする……しかしデュエルがそれを遮る。レイラ機の攻撃によりアークエンジエルが次第に動きを止める。艦にはトール達が、民間人達が……

「邪魔を……しないでくれ……!!」

デュエルが斬り掛かる——しかし、キラのストライクはそれを交わした。再びデュエルがビームサーベルを振るうも、キラはその攻撃を見切りアークエンジエルの方へ向かう。

「『……!?』

「——つ!!」

ブリツツとゼダスの間に割つて入るストライクはビームライフルを連射。ニコル機はそれをガード——だが、ストライクはいつの間にか背後を取り、ニコル機を蹴り飛ばす。

『うわあああああ!?』

「——つ」

「(なんだ……あれ……)」

キラのようでキラじやないストライクの動き——次第にストライクはレイラ機に近づく。

「ストライク!……キラさん!」

「やめろオオオオオ!!」

「この動き!」

レイラ機は高速飛行形態でストライクから逃げる。そして瞬時に人型へ戻ると実体剣を装備してストライクに斬り掛かる。

「—————っ!!」

ストライクのシールドが真っ二つに切れる……だがキラはそのタイミングでビームサーベルを抜刀。レイラ機の左腕を斬り落とす。

「そんな!?」

『レイラ、どうだ!!』

「つー！」

再びデュエルが迫る—————ストライクは腰部両脇ホルダーにある対装甲コンバットナイフ”アーマーシュナイダーを取り出すと、デュエルのコクピット付近に突き立てた。

「あ、あ、あ、アアアアアアアアア!!! いだい！ いだい！ 痛いイイイイ!!」

『イザーケーク！…………イザーケーク！』

『…………皆さん一度撤退です！ 敵艦隊がこちらに来ます！ デュエルの損傷も見過ごす訳にはいきません！』

『ちい……手柄もないまま!!』

アークエンジエルを守るストライクの前に、レイラ達は撤退を余儀なくされる。ショウマとムウをよそに、キラによりアークエンジエルは守られた。

「(…………ゼダス…………つー!)」

ショウマはモニターに映ったゼダスに、危機感覚える。

PHASE——16 「戦いへの選択」

デュエル達を退けたアークエンジエル。ショウマはパイロットスーツを着たままブリッツのコクピットでコンソールを操作して、ゼダスの映像を繰り返していた。本来なら存在しない機体だ。

「(やつぱり俺の……せいなのか……どうする……)」

「——ショウマ!」

「おわ!?く、クリス!?」

「なかなか出ないから、心配したんだぞ!……全く」

「すまない」

クリスに手を引かれ、ショウマはひとまずブリッツのコクピットから出る——アーケンジエルは第8艦隊と合流していた。ショウマはクリスと共にキラ達とある人物を待っていた。マリュー、ムウ、ナタルは帽子を被りランチから出てきた人物に敬礼する。

「ほほう!いや、ヘリオポリス崩壊の知らせを聞いた時はもうダメかと思つたぞ!それがここで、君達と会えるとは!」

「ありがとうございます!お久しぶりです、閣下」

「ナタル・バジルールであります」

「第7機動艦隊、ムウ・ラ・フラガであります」

「ああ、君がいてくれて幸いだつたよ」

「いえ、さして役にも立ちませんで」

現れたのは第8艦隊の司令であるデュエイン・ハルバートンだつた。マリュー達とあいさつを終えた後、彼女の後ろにいるキラやショウマ達を見ると彼等の方へ歩み寄る。

「ラミアス大尉、彼等が?」

「はい、操艦を手伝ってくれたヘリオ・ポリスの学生達です」

「そうかそうか。安心してくれ、君達のご家族の消息は確認している
！全員無事だそうだ！」

ハルバートンから家族の安否を聞いてキラ達は安堵する。ハルバートンはマリュー達を連れて一度その場から離れる。一方で場所は変わつてヴェサリウスの中。レイラは自室に込もつていた。

「（ショウマさん……出来れば貴方とは戦いたくありません……）」

自身がコーディネイターでザフトだつた自分を解放してくれたショウマは命の恩人だ。しかし、モビルスーツのパイロットである以上は戦闘は避けられない。

『レイラ、ブリッジへ来てくれ』

「つ！……了解！」

通信でラウから呼び出しを受けたレイラは長い髪をツインテールに結んで、ブリッジへ向かう。

「はあ!? 降りないだつて!？」

「悪いな……クリス」

「どうしてだよ!? アタシ等は軍人じやないんだ!!」

第8艦隊を通して地球へ降ろして貰えることになつた。キラやショウマ達はマリューの計らいにより一応地球軍の志願兵ということになつていた。ナタルから除隊許可証をもらつたクリスはショウマに渡そうとしたが、ショウマはそれを拒む。

「確かに俺は軍人じやない……でも、マリューさんやムウさん達を放つてはおけない」

「でも！」

「このまま俺やキラが降りたら、ストライクやブリッツは誰が動かす？ 多分キラは降りるし……」

「それは……」

「……それに愛着が付いちまつたからな……ブリッツにさ」

そう言つてショウマはブリッツを見上げる。ブリッツに愛着が沸いたのもあるが、ショウマはゼダスの存在が気になつっていた。あれが自分のせいで存在するのならなんとしても破壊しなければならない……ショウマはクリスから渡された許可証を返す。

「クリスはそのまま地球に降りる。だから『……やだ』え……」「ショウマが降りないなら、アタシも残る！」

「何言つてんだクリス！ だつて……」

「だつてもくそもあるか！ ……アタシは……お前がいなきや……」

「クリス……」

ブリッツの真下でクリスがショウマを抱き締める……困るショウマだが、一人の男性が二人に近付く。

「おや、お邪魔だつたかな？」

「貴方は……ハルバートンさん……」

二人の前に現れたのはデュエイン・ハルバートンだった。

「君にも挨拶したくてね。ブリッツをここまで、守つてくれたこと礼を言うぞ」

「いえ、そんな」

「盗み聞きをするつもりはなかつたんだが、君は残ると言うのか？ 今ならまだ間に合うのだぞ？」

ハルバートンはショウマにそう言う。元々は戦争とは関係ない学生の身であるショウマの身を案じてのことだ。

「いえ、自分は残ります。お気遣いありがとうございます。でも……マリューさんやムウさん達をこのまま……放つてはおけなくて……」「そうか……君がそこまで言うなら何も言わんさ。ただこれだけは覚えておいてくれ。迷いは自分を殺すことになる……それだけだ」

「ハルバートンさん……」

「すまないな。わたし達に力がないばかりに」

ハルバートンはそれだけ言うと、その場から立ち去つた。

PHASE—17 「限界領域」

アークエンジエルは民間人などを降ろした後にアラスカを目指す為に地球へ降下しようとしていた。第8艦隊を護衛にアークエンジエルは地球へ降下する——だが、そんなアークエンジエルや第8艦隊にザフトの艦が近付く。

「なんだつてこんな時に！」

「ショウマ！」

「クリスは部屋に戻ってるんだ！！……ちい！」

艦内に警告音が鳴り響く。ショウマは格納庫を目指す——だが、ショウマの前方にトール達がいた。

「トール……皆……アークエンジエルを降りたんじや……」

「ん？ ああ、俺達もお前と同じで地球軍に志願したんだよ」

「キラは降りるみたいだけど、ショウマは戦うんだな」

「ああ……まあ……そつか、やっぱリキラは……なら！」

「ああ！ ショウマ！」

トール、サイ、ミリアリア、カズイを後にショウマは格納庫に——すると、ショウマの視界にディアクティブモードのストライク・ブリッツが立ち並び、傍らにはストライク用試作ストライカーパックが置いてあつた。

「マードックさん！ ストライクを！」

「なあに!? ストライクで!? お前さん、出来るのか！」

「OSを弄れば、なんとか。それとあのストライカーパックを装備したいんですが」

「……あれか!? だが、あれは試作用のストライカーパックだぞ！ まだ

テストもしていなんだ！」

「けど、やるしかないでしょ…………このまま皆、仲良く死ぬ訳にはいかないでしょ！」

マードックの制止も聞かず、ショウマはストライクに乗り込む。OSを再構築して自身が扱いやすいようにする。マードックは仕方ないと割り切り、第8艦隊の補給物資の中にあつた試作用ストライカーパック” i・w・s・p”を用意する。

『本当にいいのね、ショウマ君……』

「仕方ないでしょ。どうせ今ここで降りたって、G兵器の機密を知つた俺を地球軍が放つてはおかいでしょ」

『それは……』

「取り敢えず、限界ギリギリまで出ます！今は戦いますから」

マリューはこの状況下で出ようとするとショウマを止めようとした。しかし既にデュエル・バスター・イージスとゼダス2機がいる。第8艦隊の艦が次々と沈んでゆく。艦隊が全滅すると予測したショウマはギリギリで出撃する。

『カタパルトオンライン！ストライカー・パックは……i・w・s・pを装備！進路クリア、ストライク発進どうぞ！』

「キラ、今は借りるぞ。お前の相棒を……ストライク、頼むぞ！」

ストライクはi・w・s・pを装備して出撃する——ムウは現時点で待機の為出撃していない。限界まで時間を稼ぐ……ショウマは艦隊を守る為にも動く。だが……

『ようやくお出ましかア!!ストライクウウ!!』
『デュエル!?装備が!』

ストライクに近付く機影……それは追加装甲などを装備したデュエルアサルトシュラウド。デュエルはビームサーベルを振るい、ストライクは i・w・s・p にある武装 9・7メートル対艦刀でサーべルを受け止める。

『この傷の礼だアアア!!』

「今お前を相手にしている暇はア!!」

デュエルを蹴り、ストライクは 115mm レールガン・105mm 単装砲を放ち、迫るジンを撃墜する。しかしデュエルはそれでもストライクを追う……前回の戦闘で顔に傷を受けられた屈辱を晴らすために、ストライクを倒そうとする。

『イザーク出過ぎです！ ディアツカも！』

『ちい！ やばい……戻れない！』

『うるさいっ!!』

レイラのゼダスがストライクとデュエルの間に入る。ゼダスレイラ機が実体剣を構えてストライクに斬りかかる。シールドは通常のエールで使用する時の物であり、ゼダスの実体剣を受け止め切れずに再び真っ二つになる。

「なかなかやる！」

『X-105 ストライク……キラさん……でも動きが違う』

レイラ機とストライクがぶつかり合う——一方で降下シーケンスに移行しているアークエンジェルからブリッツとメビウス・ゼロが出撃する。

『ブリッツとMAか！ くそ！』

「しつこいんだよ、お前等つ！」

『ショウマ！ 無事？』

「キラ！ なんで……」

『僕も戦う……僕だけ何もしないのは……よくないから!』

キラの駆るブリッツはトリケロスに内蔵されたビームサーベルでバスターを退ける。だがザフトの攻撃により艦は沈んでゆく——やがてハルバートンの乗るメネラオスが爆発する。大気圏突入するアーヴェンジエル……ムウは戻るものシヨウマとキラはデュエルに阻まれて艦へ戻れない。

— . . . ! ?

『無い!』の無いは!

大気圏に近付き、ストライク・ブリッツ・デュエル・バスター・ゼダスは地球側へ引き込まれてゆく。だが、そんな状況でもデュエルはストライクとブリッツにビームライフルで砲撃する。だがそんな時にメネラオスから射出された民間人のシャトルが降下していた。

「つ！やめろオオ！それにはアアア！！」

ブリッツを駆るキラはシャトルを守ろうとする——そのシャトルには折り花をくれた女の子が乗っていたのだ。キラは必死にシャトルに手を伸ばした。しかし、触ることは出来ず、デュエルから放たれたビームがシャトルを撃ち抜く——

ストライクはブリツツを抱えて大気圏へ突入する。

PHASE—18 「フレイの影」

第8艦隊を犠牲に地球へ降下したアーチエンジエル。だがアーチエンジエルは当初予定していた着地ポイントより外れてザフトの勢力圏内であるアフリカ北部にいた。ストライクとブリッツを回収したもの、大気圏ギリギリでキラを庇っていたショウマは疲弊していた。

「ダメだ……目眩がするぜ……くそ」

視界が揺らぎ自身の部屋へ向かおうとしたショウマ……だが体調が優れず体勢を崩す。しかし、そんなショウマの前に白髪の少女が現れる。

「クリス……なのか」

「ええ。よく頑張ったわね……さあ、部屋に行きましょう?」

「(クリス……ダメだ……目眩がして顔がよく見えない)」

白髪の少女はクリス——ではなく、フレイ・アルスターだった。地球軍の女性用制服に身を包んだ彼女は笑みを浮かべてショウマを部屋へ連れて行く。一方でクリスはショウマを探していた。

「何処に行つたんだ……ショウマ……っ!」

フレイはショウマをベッドに寝かせると部屋の扉をロックした。薄暗い部屋の中でフレイは笑みを浮かべる。自身の目的の為に最初はキラ・ヤマトを利用しようとしていたが、ショウマが邪魔に入つたことでキラはフレイを避けていた。邪魔をしたショウマが許せない……だからフレイは“復讐”することにしたのだ。

「（パパを殺した、 コーディネイター……！）」

「クリス……すまないが、 水を……」

「ええ、 いいわよ？ ただし……私との事情が終わつたらね」

「——つ!?……お前！ クリストじゃないな！ つ!?」

ようやく目眩が收まり、 ショウマはクリスではなくフレイだつたことに驚愕する。 すぐに部屋を出ようとしたショウマだったが、 力が入らず床に落ちる。 フレイはゆっくり歩み寄ると、 ショウマに跨がる。

「や、 やめろ……何をする気だ！……」

「何つて……決まつてるじゃない。 私の為に貴方は私の騎士になるの……だから」

「やめろ！ 離せ！ 離せ……」

「駄目よ。 私の邪魔をした罪……償いなさい。 でも男の貴方からすれば喜ばしいことじやない。 女の子とエッチ出来るんだから」

「誰がお前なんかと……離せよクソ女！」

「貴方は私の物よ。 キラが無理なら貴方でもいいわ……悪いものは全部やつつけて貰わなくちゃ……」

フレイはパイロットスーツを脱がせて、 ショウマを裸にするとそのままショウマに覆い被さる——ショウマは抵抗出来ず、 ただ涙を流すしかない……

アークエンジエルから離れた場所で二人組の男がいた。

「どうだね、噂の大天使の様子は」

「はつ！今のところ特に動きはありません！」

「地上はNジャマーの影響で電波状況が滅茶苦茶だからな……彼女は未だお休みか」

そう言いながらコーヒーを口に運んだ男——”アンドリュー・バルトフェルド”は部下である”マーチン・ダコスタ”と共にアークエンジエルを見張っていた。この状況を利用して、バルトフェルドは動こうとしていた。

「さあ、戦争に行くぞ」

バルトフェルドはそう言うと、その場からダコスタ共に離れる。

PHASE—19 「燃える砂漠」

「キラ、大丈夫か？」

「無理もないわよ……あの状況じゃ」

「うん……でも……でも僕は……」

キラは地球へ降下した後、ブリッツのコクピットで泣いていた。守れなかつた女の子の命……それに何も出来なかつた自分が許せなかつたキラはぶつけようのない怒りと悲しみに満ちていたが、トールとミリアリアのサポートでなんとか落ち着いていた。

「キラ！ それに二人も今いいか！」

「クリス……どうかしたの？」

「どうしたのよ？」

「ショウマが見当たらぬんだ!!」

「ショウマが……」

クリスが慌てた表情でショウマのことを尋ねた。しかしキラ、ミリアリア、トールもショウマを見ていなかつた。しばしの沈黙が続く中で、艦内に警告音を鳴り響く。アーチエンジエルに攻撃する謎の敵……キラはひとまず格納庫へ急ぐ。だがその時だつた……キラの方にやつれたショウマが横たわつていた。

「ショウマ!? ……一体何が！」

「オイショウマ！ ショウマ！」

「つー・ミリィー！ すぐ人にを！ キラはひとまず頼む！」

「(ショウマ……)」

ひどくやつれたショウマをクリスは心配する——キラはひとまずショウマをトール達に任せて格納庫へ行こうとした。

「ショウマ……くつ！」

「クリス待つて！どこに行く気？」

「ブリツツだよ！ショウマがそんな状態なのに……キラ一人じゃ無理だ！」

「でもクリスはモビルスーツには——『うるせえ！』クリス！」

「（ショウマ……！）」

クリスは格納庫へ入り、ブリツツのコクピットへ入る。そしてキーボードを操作して砂地に対応させるとブリツツを起動させる。ショウマの変わりに戦おうとするクリスを追うキラもストライクへと乗り込む。

『オイ坊主！ブリツツには誰が乗ってる!?』

「クリスです！マードックさん、取り敢えずストライカーパックを！クリスを連れ戻します！」

『あ、ああ！分かった！』

クリスはマリュー達の制止も聞かずに発進していた。そしてキラのストライクは”マルチプルアサルトストライカー”を装備。

「キラ・ヤマト、ストライク行きます！」

マルチプルアサルトストライカー装備のストライクが砂地へ降りる。ブリツツはビームライフルである物を撃っていた。それはザフトの陸戦用MS”バクウ”だつた。キラはブリツツへ近づく。実際に片手でストライクを砂地へ対応させた。

「クリス下がるんだ！実戦経験のない君じや！」

『でも……ショウマがいなきや、キラ一人じや無理だろ！あんな数、倒せるのか！』

「（数は確かに多い……より多くの戦力が必要だ……でもクリスは実戦経験はない。なら）」

キラはクリスにアークエンジエルを守るように指示し、キラは迫るバクウにアグニを発射。しかし砂漠の熱滞留で的に当たらない。アグニを仕舞い、ストライクは対艦刀 シュベルトゲーベルを構えた。

「ショウマばかりに負担を掛けたのは僕の責任だ……だから今度は僕が！」

迫るバクウにストライクはシュベルトゲーベルを振り回して1機を真つ二つに斬る。爆発するバクウを後にアグニを構えたストライクは近距離でもう1機のバクウを撃つ。

「（あと何機だ!?）」

まだまだ現れるバクウ。右腕に装備された”パンツアーアイゼン”を放ち、バクウを捉える。

『な、なに!?』
「……くつ！」

再びアグニを放ち、バクウをまた撃破。キラはアークエンジエルを守る為に必死に機体を動かす。だが、装備するストライカーパックの関係でストライクは体勢を崩した。その隙に戦闘ヘリやバクウが攻撃を加える。

「ぐつ!？」

『もらつたアア！な、なに!?』

バクウが再び迫ろうとした――だが何処からか飛来したミサイルにより戦闘ヘリが撃墜。キラやクリス、アークエンジエルのブリッジクルーが何事かと踊る。それは”明けの砂漠”というレジス

タンスだつた。砂漠の虎に抗う存在……そしてストライクの近くに1台の車両が止まる。

『そこのモビルスースのパイロット！死にたくなければ、こちらの指示に従え！』

「え……」

突如として現れた助つ人……キラはマルチプルアサルトストライカーをパージし、明けの砂漠に指示されたポイントへバクウを数機誘う。ストライクを追つて、バクウ数機は追いかける。やがて指示されたポイントに着き、バクウ達も到着——そしなてストライクが再びバクウから離れたと同時に、バクウが爆発する。

「ああ……あ……」

その光景を目の当たりにしたキラは、言葉を失いつつも自分が生きていることに安堵した。

PHASE—20 「アセム・アツシユ」

キラがアークエンジエルを守る為に奮闘している頃、宇宙海賊ビシリアンの受領であるアセム・アツシユは身分を偽つてプラントへと来ていた。アプリリウ市へ入り、アセムは車を走らせてある人物達が住む屋敷に向かう。

「たく、あのわがまま姫め……ま、セレナの顔も見たかつたし好都合だが」

車を走らせて數十分。屋敷の中へ入り、アセムは二人の姉妹に出迎えられた。

「お久しぶりです！アセムさん！」

「セレナ、久しぶり。元気にしてたいかい？」

「はい！」

「なら良かつた……さてと」

「早かつたわね」

「ああ。仕事が早く片付いたんだ」

黒いビジネススーツを着用しているアセムの前には、かつてアークエンジェルでラクスとシェリルと共に保護されていたマリア・カデンツアヴナ・イヴと、妹のセレナ・カデンツアヴナ・イヴがいる。マリアとアセムはあることがきっかけで知り合い、今では友人の関係だ。ちなみにセレナは友人以上の感情を抱いているのは内緒の話だ。

「どうですか、アセムさん……頑張つて作つてみました」

「うん。とてもおいしいよセレナ」

「ありがとうございます！」

「良かったわねセレナ。セレナつてば、昨日からアセムが来るつて分

かつて張り切つてね』

『マリア姉さん!?そ、そんなことは別に!』

『(はあ……照れてるセレナ、可愛いすぎ)』

「おい、涎垂れてんぞ」

顔を赤くして焦るセレナに思わずにはやけてしまうマリア……しばらくセレナも交えて話をしていた最中、マリアはあることを思い出す。

「そう言えばアセム……私やラクス達が宇宙で一時遭難したことは知ってるわよね?」

「ん?ああ。確かにニウスセブンを訪れて地球軍とトラブルになつたあれだろ?」

「ええ。実は少しだけ通信?……で、情けない叫び声を聞いたのだけど……」

「情けない叫び声?……ああ……それか。確かにありや――――――」

それは随分前に遡る――――アセムはマリア・ラクス・シエリルが追悼慰靈団としてニウスセブンへ訪れた際に地球軍の臨検に遭い、些細なざざざざでトラブルになり地球軍と交戦することになつた事件があつた。たまたまアセムはニウスセブンの近くにいた為、マリア達を助けようとしていた。

『交戦してるな……ん?なんだりや』

『ゼン!なんとか持ちこたえるんだ!やるしかねえぞ!』

『きいいいいイイイイイイ!!ま、ままマジで当てて来たアアア!?もうやだアアアアアアアア!!!』

赤いフレームのMSと銀色のモビルスーツがマリア達を逃す時間

を稼ぐ為に地球軍と応戦していた。アセムは一早く赤いフレームのMSと銀色のフレームのMSと共に地球軍を退けた……その隙にラクス・マリア・シリル達は救命ポッドに入り、宙域に放たれて、その後にやつて来たアークエンジエルによつて保護された。

「そいつ等は確かジャンク屋だつて言つてたな……名前なんつたけな……」

「なるほどね……まあ、その謎が解明出来たのは良しとしましよう。アセム、今日呼んだ用件なのだけど」

「……なんだ？」

「貴方に調べて欲しいことがあるの」

マリアは真剣な表情を浮かべてアセムにある依頼をした。アセムはそれ聞いて、依頼を引き受ける。

「お願いするわ。こんなのが開発されたら、戦争は終わるどころか泥沼化するだけだわ」

「同感だな……（やつぱりそうなつてるよな……はあ）」

マリアから手渡された1枚の写真……そこには深紅のMS”ゼイドラ”が写っていた。アセムはある程度の変化があることは覚悟していた為、動搖はしなかつた……

「（AGEのモビルスーツ……それもヴエイガン製かよ……はあ）」

PHASE—21 「カガリ」

アークエンジエルの窮地を救つたのは、明けの砂漠”というレジスタンスだった。レジスタンスに救われたが、その明けの砂漠の中にキラは見知っている人物がいた……金髪の少女”カガリ”はストライクを見た後、キラに殴り掛かる。

「お前……お前が何故あんなものに乗つている!?」

「あつ……君は、あのモルゲンレー^テにいた」

「くつ！」

「オイ! 何すんだ!?

「は、離せ！」

再びカガリはキラに殴り掛けようとしたが、ブリツツから降りてきたクリスがそれを止めた。レジスタンスとアークエンジエルが合流している頃、レイラはイザーク、デイアツカと共に大気圏での戦闘で地球に降りてジブラルタル基地にいた。そしてレイラはイザークとデイアツカを後ろに、ラウと通信していた。

《三人共、無事にジブラルタルに入つたと聞いて安堵している。前の戦闘ではご苦労だった》

「はい」

「……」

「死にそうになりましたけど

《残念ながら、足付きとストライク、ブリツツを仕留めることは出来なかつたが君達が不本意とはいえ、地球に降りたのは幸いかもしれん。足付きは今後、地球駐留部隊の標的となるだろうが君達もしばらくはジブラルタルに留まり、奴等を追つてくれ——無論、機会があれば討つても構わんがね?》

ラウはそれを告げると通信を切る―――大気圏での戦闘でレイラのゼダスとイザークのデュエル、ディアツカのバスターはそのまま地球へ降下したが、駐留部隊に保護されて今に至る。

「宇宙には戻つて来るなつてこと?」

「そうではないでしょ……」

「けどよお、駐留軍と一緒に足付きを探して地べたを這いずれつてい

うのか?」

「―――やるしかなかろう。それに」

レイラとディアツカが話す中で、今まで黙っていたイザークが顔に巻かれた包帯をほどく……顔には、以前ストライクによつて付けられた傷が生々しく残つていた。

「討つてやるさ……この俺がな!」

「イザーク……」

「(……ショウマさんは……無事に降りたんでしょうか……)」

あの大気圏での戦闘で、ショウマがいたのを知つていたレイラは彼の安否を気にしていた。一方でアークエンジエルは明けの砂漠の案内で彼等が提示した目的地にいた。キラはクリスの要望で、ブリツツのOSを書き換えていた。

「―――よし、これでいいよ……でも本当に戦うのクリス?」

「……ショウマがあんな状態になつたのはアタシのせいだ……だからアタシも戦う。見て いるだけじゃ、ダメだ」

「クリス……いや、ショウマをあんな状態にしたのは僕の責任だ。僕が迷つていたから……」

日差しが照り付ける中でディアクティブモードのストライクとブリツツが立ち並んでいた。暑いのがうつとしく感じる中で、ストライ

クとブリツツの元に近寄る人影がいた。

「あ……おいキラ」

「なに？」

「あれ、さつきの奴じゃないか？」

「え……」

コクピットから確認するとカガリの姿がある。キラはクリスと共に機体から降りた。

「またキラを殴りに来たのか？」

「違う……その……謝りに来たんだよ……さつきはその済まなかつたな」

カガリは照れくさそうに謝る。そんな彼女にキラとクリスは思わず笑ってしまう。

「つ!? な、何がおかしい!……というか、あの時間けなかつたがお前は？」

「……クリス・ユキネだ。クリスでいい」

「そ、うか……クリス、お前がなんであんなものに乗つている? それにお前も」

「アタシはブリツツのパイロットじやない……ただの臨時だ。ブリツツのパイロットはアークエンジェルにいる」

「え……」

「けどな……」

クリスの表情を見て、何かを察したカガリはそれ以上聞くのをやめた——アークエンジェルにある一室。そこにショウマは寝かされていて……そんなショウマの元にフレイが再び近づいていた。

「あんなことで気が狂うなんて、本当にバカなんだから……でもいいわ。邪魔者はどんどん消しちゃわないと……次はあの女ね……」

フレイの言うあの女とはクリスのことだ……フレイは笑みを浮かべて、キラに近づこうと企んでいた。

PHASE—22 「ショウマの目覚めと飛び立つ黒い翼」

「キラ、こゝに飯置いとくぜ」

「ありがとうトール」

夜になり、キラはまだ外で作業していた。宇宙での戦闘による心の傷はなんとか安らぎご飯も食べれるようになつた。トールがキラの元へご飯を届けに現れ、キラはそれを受け取る。

「(そう言えばショウマ……大丈夫かな……あれから見に行つてないけど)」「こゝにいたのねキラ！」

「……フレイ」

トールと入れ替わるように現れたのはフレイ・アルスターだつた。キラはいきなり現れたフレイに不信感を抱いた……今までコーディネイターの自分やハーフコーエィネイターであるショウマやクリスに近付かなかつたフレイが何故今さらこゝに……と。

「実はね? キラに謝りたくて」

「謝る? ……フレイ、その腕に付けている物……」

「ん? ……ああ、元々私が持つてたものなの」

フレイはミサンガをキラに見せた……だがキラはそのミサンガには見覚えがあつた。そのミサンガはクリスがショウマから貰つた物だ。何故それをフレイが持つているのか……

「フレイ! 何処にいるんだ!」

「サイ! ……ああ、もう、しつこいな!」

「(……明らかに変……だよな)」

サイの声に苛立つフレイ……サイとフレイは婚約関係にあるはずなのに、何故かサイの声を聞いて嫌そうな表情を浮かべるフレイにキラは警戒心を抱いた……フレイに再び問い合わせようとした時——

「空が……空が燃えてる！」

「……！」

笛の音が聞こえた——一方で、クリスはショウマに付きつきになっていた。あの宇宙の戦闘から地上に降下した後疲弊で倒れたショウマは一度も目を覚ましてなかつた。

「ショウマ……ショウマ……お願ひだ……目を覚ましてくれ……」「…………」

「アタシ……お前ばかりに負担掛けちまつた……ショウマ……目覚ましたら何でも言うことを聞いてやる……だから……」

「——なら、クリスのおっぱい……触りたいかな」

「……っ!?」

何時までも目覚めないショウマにクリスは彼の手を取り、ずっと名前を呼んでいた……すると、そんなクリスの頭を撫でたのは紛れもなく目を覚ましたショウマだつた。

「つ……このバカア!!」

「ふぐっ!?」

「全く……心配ばかり……かけやがつて！」

「す……すまない……」

「今回ばかりは本当に心配したんだからな!?」

「…………」

「……ショウマ？」

「クリス、近くにフレイはいるか?」

「…………アイツなら外にいるぜ？アイツがどうかしたのか？」

「――――――クリス、これから言うことは内緒で頼む」

ショウウマは倒れた経緯をクリスに話した。自身がフレイからレイブされたことを話し、それが原因で精神に異常をきたして倒れたのをショウウマは告げる……もちろんそれを聞いて黙っているクリスではない。

「一発殴つてやる！」

「待てクリス」

「なんでだよ！……だつて……だつてショウウマはアイツからひどいことされたんだぞ！それを黙つてろつて言うのか!?」

「クリスがそれを言つたところで、艦の人達が信じると思うか？……どうせ、あのワガママ娘が上手いこと言つて嘘を付くだろう。それに証拠だつてない」

「つ……」

「……怒りが収まらないのか？」

「当たり前だ！……くつ」

「ならクリス……俺を癒してくれ」

「は、はあ？……なんだよいきなり……」

「あんな女に抱かれて、気持ちいい訳ないだろ？……頼む……それに俺も……さ」

ショウウマは笑つてはいるが無理にその表情を作つていることを知つているクリスは深呼吸して、ショウウマを抱き締めた。

「……怖かったよな、ショウウマ……大丈夫……アタシがいるからな」「クリス……ありがとう……」

ジブラルタル基地――――レイラは自身の愛機となつてゐるゼダスの整備を自らおこなつていた。ゼダスはイージスを元に造られた試作型のモビルスーツであり現在2機しか建造されていない貴重なゼダスを赤服である自分が受け取つたというプレツシャーがレイラにのし掛かつてゐる。

「ゼダス……さすが高性能……G兵器にも劣らない力です……」

イージスの変形機構を参考にゼダスには高機動形態がある……しかも大気圏内でも飛行出来る。レイラは一足先に”砂漠の虎”と合流する為にジブラルタルから飛び立つ。

「（ショウマさん……もし貴方がいるなら……今度は私が助ける番です……）

『『レイラ機、発進どうぞ』』

「――レイラ・マルカル、ゼダス出ます！」

高機動形態へなり、レイラのゼダスが飛び立つ。ゼダスを加速させて、レイラは自由自在にゼダスを操る――。

PHASE—23 「陽はまた昇る」

ショウマが無事に目覚めた時を同じくして、キラはエールストライクで炎に焼かれたと騒がれているタツシルの町へ向かつた。確かに町は業火により燃やされ、奇襲があつたことが分かる。

「なんでこんな……あれは……人？」

街は焼け野原……人が生存していることなどない……はずだつた。キラはモニターに映る人々を確認した。小さい丘には既に町から逃げ出した人々がいたのだ。しばらくしてアークエンジエルからキラ達と明けの砂漠が合流し何故人々が生存していたのか理由が分かつた。

「虎から警告があつたのさ。今から町に攻撃を仕掛けろ。早く逃げろとな」

老人が言うには砂漠の虎が町一体に攻撃を仕掛けると警告し、その警告もあつて難を逃れたのだ。ひとまず人々は無事だつたが、虎の仕打ちに腹を立てた明けの砂漠は怒りを隠さずに砂漠の虎を撃退に向かう。

「ムウさん、どうするんです？このままだと、彼等全滅しますよ」「だよなア……はあ、なんでこう……やり返す事しか浮かべねえかな」「ひとまず僕が行きます」

キラはストライクに乗り込むと明けの砂漠を追いかける。だが既に彼等の行動を察知したのはショウマだつた。アークエンジエルからブリツツが発進——ミラージュコロイドを用いたブリツツはすぐ動く。

「全く…馬鹿な事すんなよ！」

一方で、カガリ率いる明けの砂漠は砂漠の虎率いるバクウ達と戦っていた。バクウにバギーやバズーカで挑むカガリ達だが、バクウの前でそれは無力に過ぎない。

▣ちやこまかと！▣

▣逃さんつ!!▣

「キサカ！カガリを下がらせろ！くつ！」

サイード達は何とか応戦するも、仲間達は次々とバクウに吹き飛ばされてゆく。それをただ見ている事しか出来ないカガリは涙を堪える。

「私達を…舐めるなアアア!!」

▣へつ!!なんだ……うわあああ!!!▣

カガリに迫るバクウ――――だが、突然バクウは爆発を起こす。そもそもそのはずだ…そこには、X207 ブリツツがいたのだ。ショウウマはカガリ達の無事を確認すると機体を動かす。

「あんまり困らせるなよ……胸騒ぎがするから出てみりや、正解だな」

▣ブリツツか！所詮は人型アアア!!▣

「遅いっ！」

ブリツツはランサーダートを放つ。瞬時に爆発を起こし、迫るバクウにも再びランサーダートを放つ。

「ほう。前に見た時とは違う反応だ」

「つ!? 隊長！この区域に接近するMS！」

「どうやら味方だ。我々のな」

“アンドリュー・バルトフェルド”がそう言った時、上空から黒いMSが現れる。それはあの大気圏で戦ったゼダス……もちろん操縦者はレイラ・マルカルだ。

「皆さん下がつて！ここからは私が時間を稼ぎます！」

『援軍か！助かる！』

セダスはブリッツに向き合い、実体剣を装備するとブリッツに向かう。不気味な電子音を鳴らしながらセダスは迫る。

「この!?」

「いくらブリッツといえど、砂漠では！」

「舐めるなよ……！」

ブリッツは砂埃を起こして姿を隠す。ゼタスはビームバルカンで砂埃を消し去り実体剣を向ける。

「（ブリッツに乗っているんですねショウマさん……ですが、今は砂漠の虎の撤退を手助けすること。ショウマさん、いづれ貴方は私が助けます）」

バルトフェルド達が撤退したのを確認すると、レイラはそのまま撤退してゆく。今度は自分がショウマを助ける番だと言い聞かせながら。

「やつぱり、キラみたいに行かないか……」

ショウマはヘルメットを脱ぎ捨てて、こちらに向かうストライクに視線を向けた。

PHASE—24 「怒りと買い物と時々虎 1」

☒ ショウマ!? ショウマなんだね!? 目が覚めたんだね…☒
「まあな。でもキラ……あとは任せるぜ?あのバギー…訳ありなんだ
ろ?」

☒ ……ああ☒

ブリッツの傍らにストライクが着地する。ゼダスによる介入はさ
れたが明けの砂漠は最小限の被害で済んだ。だが、彼等は虎に報復を
仕掛けようとしてこの様だ。キラは怒りを現したままコクピットか
ら降りる。

「……死にたいんですか?こんなことしても…無意味じゃないです
か」

「なんだとオ…貴様ア!!」

「本当のことじやないかっ!! 君や、貴方達は…ショウマが来なければ
死んでいた!」

「だ、だが! 私達は戦つてる…戦つてるんだア!!」

キラの言葉にカガリは胸ぐらを掴む。だが、キラはカガリの手を払
い除けた。

「気持ちだけで…気持ちだけで一体何が守れるんだア!!」
「…っ!」

「「「…………」「」」
「僕や…ショウマは宇宙で沢山の死を見てきた…これ以上…誰かが死
ぬ姿は見たくありません……」

キラがそう言つたと同時にカガリ達は黙り込んだ。宇宙で沢山の
人を守れなかつたキラにとつて彼等の行為は許されるものじやない。

キラはストライクに再び乗り込むとブリツツと共にアーケンジーエルへ帰投する。

数時間後

「お前、キラにあんだけ怒られたのに護衛にするつてどんだけメンタル強いんだよ」

「う、うるさい!! そういうお前は：確かシヨウマだろ」

キラがブチキレた数時間後。カガリはシヨウマ＆クリス、キラを護衛に買い出しの為にバナディーヤの町に来ていた。

「ていうか、なんでアタシまで」

「そう言うなよクリス。女子がもう一人ぐらいないとな」「別に構わないけどよ……つうかシヨウマ、大丈夫なのか？」

「俺なら大丈夫さ」

「本当に大丈夫？ シヨウマ：クリスから聞いたよ、フレイの事」

「大丈夫じゃないけど……何時までも籠もる訳にもいかんだろう？」

クリスから経緯を聞いたキラはフレイに幻滅しつつもシヨウマの

体調を気遣う。賑わいを見せる人々にショウマとクリス、キラはヘリオポリスにいた頃を思い出す。

「忘れてたけど…アタシ等もああやつて…笑つてたな」

「うん……そうだね……」

「まあ昔を思い出しても仕方ない。今俺達は戦いに身を置いてるんだ…キラ、それだけは忘れるなよ。クリスもな」

「ああ。そうだけどさ……でも……」

クリスはヘリオポリスでの暮らしが思い出し拳を強く握る。そんなクリスを見てか、ショウマはクリスを抱き寄せる。

「ひや!? ば、馬鹿お前！こ、こんなところで！」

「大丈夫だよクリス。お前には俺がいるんだ……心配するな

「……バカ……は、恥ずかしいだろ……たく」

クリスを宥めるショウマ。顔を紅くしながらもショウマのぬくもりを感じるクリスはいい気分だ。

「なあキラ…私達…」

「うん。凄いアウェイだよね……ははつ…」

PHASE—25 「怒りと買い物と時々虎 2」

沢山の買い物を終えたショウマ・クリス・キラ・カガリはひとまず休憩の為にカフェで一休みしていた。普通の買い物ならまだしも、フレイが図々しくあれこれ買つて来いと指示を出しており、クリスはそれが気に食わなかつた。

「アソツのなんて買わなきやいいのに、なんで買うんだよ…」

「ほら…一応、仲間だしさ…いくらサイ達が言つてもフレイがあんな感じだから…」

「クリスから聞いていたが、フレイってやつは注文が多すぎる。化粧水だとか、香水があるもんかよ」

「所詮はお嬢様だからな。まあいいさ…お！腹を空かせて持つていればなんとやらだ」

熱さと疲れでクタクタになつているキラ、クリス、カガリをよそにショウマは運ばれてきたケバブに目を輝かせる。

「ショウマ、お前ケバブ知つているのか？」

「前になんかの本で見て知つてる！なあカガリ、ケバブはチリソースとヨーグルトソースどつちが美味いんだ？」

「そんなもん決まつている！無論——『ヨーグルトソースさ！』ああ、ヨーグルト…はあ！」

「うわ！／うお!?」

「いきなりなんだよ!?」

突然割つて入る人物がいた……サングラスにアロハシャツ＆膝までの短パンの男。いかにも胡散臭さそうな男はびっくりするキラ、クリス、ショウマをよそに続ける。

「ケバブにはヨーグルトソースさ！チリソースなんて有り得ないぞ？」

「何処の誰か知らんが、ケバブにはチリソースだ!!部外者は引っ込んでろ！」

「何を言うかね！ケバブにチリソースなんて、この料理に対する冒涜だね！」

「だから！私は――『死ね！コードイネイター!!』……!?」

「伏せろ!!」

カガリと男が言い争っている中、一人の客が銃を向けて発泡。ショウマはクリスと共に伏せて、キラも机を盾にして隠れる。

「蒼き清浄なる世界の為に！蒼き清浄なる世界の為に！」
「このコーディネイターが!!」

「まじかよ……！」

「ショウマ！」

「だな……！」

客を装っていたのはブルーコスマスの刺客。ショウマとキラは即座に動くと蹴りや拳をお見舞いする。

「クソがアアア!!」
「カガリ！」

「きや!?」

一人の男が拳銃を乱射。その弾がチリソースの容器に当たり中身が出て、カガリに掛かる。ショウマはすかさず落ちていた拳銃を拾つて発泡。

「ぐつ!?」

「観念しろ……ここには一般人もいるんだ……争いなら他でやれよ」

「ひい!!」

ショウマは殺意を込めた眼差しでそう言うと男を開放した。男は怯えながらも逃げ出した。

「はあ……」

「…………さすがはショウマさんですね……変わつていませんね」

「!!……れ、レイラ・さん…」

「お久しぶりです、ショウマさん」

背後から声を掛けられ、振り向くショウマは思わず驚愕する……何故ならそこに居たのは以前アーケンジエルから逃した、レイラ・マカルだつたからだ。

「ご無事ですか？バルトフェルド隊長」

「大丈夫だ。彼等のおかげで無傷さ」

「バルトフェルド？……バルトフェルドだと!?」

「……おや？びっくりするのも無理ないか……」

アロハシャツのサングラス男の正体……それは砂漠の虎こと、アンドリュー・バルトフェルドだつた。

PHASE—26 「レイラ・マルカル」

ブルーコスマスによる襲撃で敵であるアンドリュー・バルトフェルドを助けたショウマ達はバルトフェルドの計らいで別荘へとお邪魔する事になった。そこから二手に別れ、ショウマ&クリスはレイラの部屋へと入る。

「お元気そうで何よりですね……ショウマさん、クリスさん」

「なんでお前があの砂漠の虎と一緒にいるんだ……まさかお前本当に……ザフトなのかよ……」

「クリスさん。私は今、ザフトの軍人として戦っています……それに私は貴女達に幾度と立ち塞がっていますよ」

「なんだと!？」

「ショウマさん……貴方は気付いていますよね……私がゼダスのパイロットだと」

驚くクリスをよそにレイラはショウマにそう言い放つ……ショウマはまるで分かつていたようにゆっくりと頷く。

「多分いるんだと思つてましたよ……想像したくなかったんですけど。けど貴女は元々アークエンジエルにいたし、あのイーディス達に混ざついていても不思議じやない……貴女はアークエンジエルの行き先や中身を知つている……だから……」

「なるほど……ですが私は、一度貴方達に助けてもらつたゞ身分です。私としては戦いたくありません」

青を基調としたドレスに身を包んでいるレイラは二人にレモンティーを差し出して、椅子へと腰掛けた。ショウマとクリスは少々警戒心を露わにしながらも着席する。

「ショウウマさん、クリスさん……もし良ければ私と一緒に来ませんか？」

「お前……それって……」

「俺達をザフトにですか……」

「いえ。私は貴方達を本当に助けたいんです……ショウウマさんだって、本当は戦いたくないはずですよね？……今戦っているのはキラさんや皆の為でしよう？……」

「…………」

「私は今後もアークエンジエル撃墜任務に就きます……貴方達がこれ以上居たら……決心が鈍ってしまうんです……」

レイラは一度ショウウマとクリスに助けられて恩を感じている。しかし立場上、自身が敵となりアークエンジエルを撃墜……それもショウマ達を含む事を考えればレイラにとつてはどうしても手が出せない所なのだ。

「レイラさん……それは出来ません」

「ショウウマ……」

「な、何故ですか！ショウウマさん……私は敵なんですよ……私はいづれ貴方を倒さなきやならないんです！分かつてるんですか！」

「だとしても……アークエンジエルにはキラやトール達……マリユーさんやムウさんだつているんだ……もしここで俺がレイラさんの所へ行けば、キラやマリユーさん達を助けてくれるのか？」

「それは……」

「なら話は無理だ……レイラさん。立場は違えど互いに戦っている以上は私情は挟んじやいけない……俺は何が来ようと戦う。クリスや皆を守る為に」

「…………もし次会えば……その時は……」

レイラがそう言い放ととした時、ショウウマはクリスを連れて部屋

を出る。レイラはその場に残されたままだ……

「私はただ……助けたい……だけなの……」

レイラの言葉を聞く者はいない。

PHASE—27 「砂漠の虎、黒き翼1」

バルトフェルドやレイラとの出会いと再会から数日後、アークエンジエルは明けの砂漠から提供された基地を後にして全速力で移動を開始する。アスラカを目指すアークエンジエル……しかしそれを見過ごす事などしない砂漠の虎は急いで追撃を開始する。明けの砂漠の援護を受けて砂漠を脱出するというものだが、正直彼等では戦力にはならない。

キラとショウマはそれぞれストライクとブリッツに乗り込む。ムウは先にスカイグラスパーで出撃している。ストライクはエールストライカーを装備して出撃する。

『ショウマ君はアークエンジエルの艦上でそのまま出来る限り攻撃を防いで。無茶な話だけど』

「やりますよ……可能な限りは」

そしてショウマもまたアークエンジエルの艦上へ。すると戦闘ヘリ アジヤイルからミサイルが放たれる。

「ゞちやゞちやと…!!」

ブリッツはトリケロスに内蔵されたビームライフルでミサイルを破壊そのまま浮上してアジヤイルを斬る——そして艦上へ戻ると警告音がコクピット内に鳴り響くと同時にミリアリアの通信に入る。

『ショウマ気を付けて！ 7時の方向からMAが来るわ！』
「なに……まさか……」

耳に響く音速が次第に近付き、その黒き翼はアーケンジエルに攻撃を加えると変形してMSへと変わる。間違いない……そのMSこそ以前に戦ったモビルスーツ ゼダスだ。

「レイラさんかよ!!」

「ショウマさん……強行手段にはなりますが」

レイラのゼダスがそのままブリツツに激突——ブリツツはそのまま下へ落下する。ゼダスもまた下へ降りると尾に付いた実体剣を装備して、ブリツツもビームサーベルを開。

「レイラさん……やるしかない……情を持つな……彼女は敵だ」「……参ります」

ゼダスは加速すると実体剣を振り上げ、トリケロスに振り下ろす……しかしブリツツはランサー・ダートを一本取るとそのまま二刀流で押し返す。一方のキラは苦戦はしつつもエールの機動性を活かしてバクウを倒していた。

「はあ、はあ、あとは！」

猛攻が続く中でひときわ目立つオレンジ色のバクウがストライクの前に現れる。

「君の相手はわたしだよ……奇妙なパイロット君

「隊長機!? あの人かっ!!」

バクウの指揮官用として開発された上位機種ラゴウ……それに乗るのは砂漠の虎 アンドリュー・バルトフェルドとアイシャ。自由自在に砂の上を動くラゴウはビームキャノンを放つ。

「くつ!!」

シールドで防ぐストライクはそのまま浮上してビームライフルを撃つ。しかしラゴウはそれを交わして、2連装ビームサーベルを展開する……そして互いにサーベルをぶつけた。

「やるな少年……だが！」

「そんな！」

ラゴウはストライクを押し返すと、そのままエールの左翼を斬る。ラゴウが着地すると同時にゼダスとブリツツが火花を散らす。

「アーヴエンジエルには、近づけさせない!!」「くっ!? ゼダスが押される……!!」